魔法使いの主様っ！

三年寝太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの主様っ！

【Ｎコード】

Ｎ７４８３Ｚ

【作者名】

三年寝太郎

【あらすじ】

もうすぐ三十路の主人公、藤野秋也が深夜に出会った一人の儚げな少女は記憶を失っており、その姿を見る事が出来たのは秋也だけ。暫く続く、舞という不思議な少女との二人暮らし。だが実は記憶を失っていたその少女は、異世界からやってきた魔術師だった。３０歳までＤＴを貫きゃ世界最強のチートな魔法使いになれるんだよプギャーｗｗｗってのを本気でやりたかっただけで。暫くは現代ファンタジーです。魔法使いになってからは異世界トリップで世界最強予定。（モバゲーにも掲載しております）

第1話　月夜に酒飲み、少女は笑う。

人生において、不思議なモノを目にする機会は誰しも二度三度はあるという。

誰から聞いた台詞とも知れないこの格言もどきな言の葉を、俺は頭の片隅から引っ張り出していた。

季節は秋の終わり頃。この世の儚さを匂わせて紅葉が散りゆく、四季の中で俺の一番好きな時期だ。

そして俺が29年という年月を過ごしてきた人生の中でも、最も美しい月夜が訪れるだろうと確信した本日。

今日はそんな紅葉を酒でも飲みながら自分のアパートの窓から眺めるとでもしようかと、最寄のコンビニに向かった深夜の二時、丑の刻。

彼女居ない歴年齢のこの虚しき俺の喉と心を潤してくれるであろう月桂冠の軟水を頭に思い浮かべつつ歩みを進めているときだった。

最寄りの神社の鳥居の奥に、不可解で怪しげなで服装をした人物の影が見えたのである。

視力はそこまで良い方では無いので、かけている眼鏡を自分の服の袖で拭いてもう一度良く見てみると、白い着物を上半身に纏った女性のようなシルエットが見受けられた。

果てさて、この時間帯に、こんな神社の鳥居の奥で何をしているのかと訝しげな視線を送りながらコンビニの方向へと歩んでいたところ。

今度はあちらの方もこちらに気付いたらしく、その身体をこちらへと翻した。
……その女性らしき人物がくるりと反転しただけなのに、俺のロマンチストな思考な脳は、これをこの世のモノとは思えない妖艶な神秘だと捉えてしまった。
それは、その瞬間に今まで雲が隠していた月明かりが彼女の姿を照らし出したことに起因するのだけれど。

その女性の着ている白い着物のような服はまるで振袖レベルの袖の長さがあり、その上着の下には赤いチャイナ風な服が目に付く。
その下には黒字のスカートという、巷では余り見られない不思議な服装であった。

そして、俺と視線を合わせたそのつぶらな瞳の色。

桃色のような、それでいて赤いような。見た人を惹きつけてしまう魅力を持った美しい瞳である。
それでいてさらりと音を立てそうな位に綺麗に揺れた銀の髪。
背中の肩甲骨辺りにかかる程度の長さの銀髪が、月夜に美しく映えていた。

こんな美しいモノが世にあったのかと感心をしていると、その女性――いや、割合小柄な身の丈や少し幼げな様子を残した顔立ちからするに、少女と称した方が良いのかもしれない。
だが、その実豊満な胸の持ち主であることが服越しにも見て取れるという、余りに魅力的な容姿でもある。

その少女は、俺の居る方向へとゆっくり歩み始めた。

その様子に、俺は足を止める。じっとこちらを見て歩いてきているのだから、用があるのはきっと俺に対してなのだろう。
それを察したのなら、来るまで待つというのが紳士である。別に紳士でもないけど。

俺のおでこ一つ分低い位の身長の少女は、俺の目の前に立つと俺の顔を見上げて、じっと俺の瞳を見つめた。

家族以外の女性との関わりが皆無な人生を送ってきた俺としては、たったそれだけの事でどぎまぎとしてしまう。

「……貴方は、私が見えるのですか？」

「へっ？」

いきなり何を言い出すのだろうか。何故見えるのか？そんなもの目の前居るからとしか……。
いや。視える、視えないの話、となると、まさか。

「ああっと、もしかして、君……幽霊さんだったりして……？」

恐る恐ると言った感じで俺はそう尋ねる。
考えてみればこんな時間帯にこんな少女が出歩いていることの方がおかしいのだ。

今の彼女の発言からするに、どうやら人外な存在であるのではないかと俺は解釈をしたのだ。
もし肯定されたら、俺は人生初の心霊体験をしたことになる。そんなことを思うと、少し鳥肌が立った。

「……いえ。違います。私はちゃんと呼吸もしていますし、心の臓も動いていますから、そういった類の者ではありません」

「え、あ。そう、なの。ええと、じゃあなんで見えるとか見えないとか……」

「私の存在に気付いた人が、貴方以外にいなかったからです。この数日、私の姿を認められた人は誰もいませんでした。道行く人に話しかけてみても、無視をしている様子では無く、私の存在そのものに気付いていない様子でしたから」

それが本当だったとしたら、なんということだろうか。

この少女は存在が薄いというレベルの話では無くなるではないか。

俺からすればこれ程目立つ容姿に顔立ちをした少女など居ないと思うのだけれど。

いや、まあこの京都は外国人の方々が多いので普通といえば普通なのかもしれないが。とにかくこの少女の服装は目立つ。

「えっと、まあ、よく分からないけれど、君の姿が見えるのは俺だけってことになるのか？」

「貴方だけなのかはわかりません。けれども、貴方以外に私の存在が見えた人にはまだ出会っていないので、今の所は貴方だけになります」

正直な所、信じられないような発言だ。

だが、この少女のつぶらな桃色の真摯な瞳に見つめられてそんなことを言われてしまうと、何故だかそれも本当の事のように聞こえ

てしまう。

「……まあ、一応その突拍子もない話を信じるとして、君は何なんだ。家は？家族は？名前は？一体どこから来たんだ。見た限り日本人のようには見えないのだけれど」

なんか職質みたいだな、これ。

「……どこから？……どこなのでしょう。ここではないどこか……。家族、家？名前……。あれ、私の名前は……？……その、何も、わからないです」

なんてことだ。完全に記憶喪失の類じゃないだろうか。

家族や家も故郷も名前も分からないときた。演技じゃないとしたら、これは警察に預かってもらった方がいいんじゃないだろうか。

「あー、まあ、取り敢えずだ。俺は近くのコンビニに酒を買いに行く予定で今ここに出てるわけで、先に一端そこに寄ってく予定なんだけど、着いてくるかい？」

なんというナンパ台詞。よもや俺の口からこんな言葉が出てこようとは。しかも十歳以上も年が離れていそうな少女に対して。

あと一か月近くもすれば俺ももうすぐ三十歳だと言うのに。

だが他に宛てもないというのなら、警察に行く前に本当にこの少女が他の人に見えないのか確かめてみても遅くはないだろう。

確かめもせずに警察に渡そうとした所で『そんな少女どこにも居ないじゃないか』なんて警察に言われたら迷惑過ぎるし。

しかも俺が危ない人認定されて逆に止められそうだからという事

もあるからして。
まずはコンビニの店員でその虚実を先に確かめておこうではないか。
「……はい。着いていきます。他に宛ても無いですし」
そう言うと、その少女は俺に手を差し出してきた。これは、なんだ。
俺に手を繋げというサインだろうか。女性との関わりの無さが定評の俺にそれは中々高難度な提案じゃないか。
そんな風に冷や汗が背中を伝いそうな位に一気に緊張が高まって躊躇っている俺の様子を見て、俺がそれを拒否したと思ったのだろうか。
肩を震わせて俯きながらその手を下ろそうとしている弱気な少女の姿が目に映った。
これは、いかん。いくらなんでも、俺以外に存在が認められなくて不安だろうに俺がそれを拒否したら相当に辛いはずだ。
そんな少女が不安げに差し出したその手を俺が見過ごす訳にはいかない。紳士的に。
俺は下ろされつつあった少女の手を、自分の右手で握った。
緊張で少し俺の手は汗ばんでいるのだが、そこは見逃してくれると有り難い。
手を繋ぎながらお互い無言で歩く事約五分。最寄りのコンビニに俺たちは着いた。
女店員の「いらっしゃいませー」の声がかかるが、どうにも張り

合いのある声では無い。当たり前か、深夜だし。
この時間帯のこういったバイトは怠い対応の店員が多いのは致し方の無いことであるから。

俺は少女の手を繋ぎながら店内を回る。
お目当てのお酒、月桂冠はしっかりと大量にカゴの中に放り込む。つまみも勿論忘れずに。

「なあ、君も何か買いたいものはあるか？買ってやるぞ」

「……じゃあ、あれが欲しいです」

そういって少女が指さしたのは、三角形のおかかのおにぎり。どうやら小腹が空いているらしい。
俺は二個程ついでにカゴの中におにぎりを放り込む。多分その位はこの娘もたべるだろう。

そしてレジに向かう前に、俺はひとつ試してみることにした。
本当に俺以外にはこの少女が見えていないのかどうかを、だ。

「なあ、ちょっとあの店員に話しかけてみてくれないか？正直な所、さっきの話はまだ半信半疑だから」

「……わかりました。でも、やはりあの人も、私には気が付かないと思います」

そういうと少女は俺の手を離し、店員の方へと向かっていった。
店員の目の前に立つと、色々と話しかけている様子だったが、店員は本当に気づいていないようで、明後日の方向を向いている。

そしてとどめと言わんばかりにその少女がその女店員のほほに触れると、なにかとんでもなく恐ろしげなモノが降りかかったかの如く女店員は混乱の表情を見せていた。

触られている感覚はするのに目の前には誰もいないという現実。

少女がそのほほに触れた手を離すと、その女店員は青ざめた様子で自分のほほに触れて辺りをキョロキョロと見回した。

丑の刻の恐怖体験に怯える店員の様子、御馳走様です。

ゆっくりとした歩みでこちらに戻ってきた少女は、「ほら」と言わんばかりに両手を横にかざして呆れた意を見せた。

どうやらこの少女の言う事は本当だったらしい。

あの店員が演技しているという可能性も無くはないが、もう俺はここで完全に信じることにした。

今の様子とこの少女の眼を見れば、俺の安っぽい思考回路の判断材料としては、もうそれで充分だった。

▼

「さあ、遠慮なく食べてくれ。おにぎりなら三つある」

「……ありがとうございます。……はむ」

少女と共に自分のアパートにまで戻った俺は、ベランダに出ながら二人で月見をしていた。

元々その為にコンビニまで足を運ぶつもりであったのだし、このような綺麗な少女と共に月夜を拝めるというのなら何も言う事は無い。

月桂冠の柔らかな喉越しに加えてこのような状況だ。酒がすすむというもの。

因みに少女にはお酒は飲ませていない。出会ったばかりの明らかな未成年の少女に勧める程俺はアホでは無い。

しかし、目の前で正座をしながらおにぎりを食べる美しき少女というこの図も、何だか面白いと言えば面白い。

「この数日間、何も食べていませんでした。貴方の行動と人柄を見るに、この分だと今日私はこの家に泊めて貰えるのでしょう。感謝します」

「ああ、気にするな。何だったら毎日泊まってくれても構わないさ。君みたいな可愛い娘がいてくれるなら、寧ろこちらが嬉しい位だからね」

ふむ、飲み始めた酒の酔いが少しはまわっているようで、俺の口から何やら恥ずかしい発言が飛び出ているようだ。だが実際、これは本心だ。

実は俺という存在は親に勘当された身であるのだが、その際に金持ちの親からは大量の餞別金を貰っている。

身よりも不明な少女一人の食費の工面など訳がない。

「……それは、つまり。この私を夜伽(よとぎ)とする代わりに、私をこの宿に住まわせる、ということでしょうか。……殿方の夜の慰め等、したことの無い故、何分充分には役に立てないとは思いますけれど」

「……はい？」

「貴方以外に私の存在が見えないのであれば、どこぞに不法滞在してしまえば住むと同じ事なのです。けれど私もここ数日のようにまた一人になるのは不安ですから、多少はその様な行為を行うことも我慢致しましょう。孤独とは、耐え難いものですので……。して、確かこの国では、こういう形式を御恩と奉公と呼ぶのでしたっけ。貴方の名前をお聞かせ願いたいです」

いきなりの饒舌。怒涛の展開。よく分からない文脈。

待て、待ってくれ。多少俺も酒に酔いはしているのだが、その言葉には俺も冷静になる。

「あー、あのだね、君。色々と正したいことは多々あるのだけれど……取り敢えず君を夜伽(よとぎ)ってか、何でそんな難しい言葉知ってるのさ……そういう役割を担ってほしいなんて思っていない。実際俺は所謂(いわゆる)、君の保護者みたいなもんだ。見た所、君の年は１６、１７って所か？警察に頼むべきなのだろうけれど、君の存在が見えないんじゃ仕方ないから、ここに居てもいいぞって話だ。あと、俺の名前、か。藤野秋也(ふじのあきや)って言う名だ。以後なんと呼んでくれても構わない。逆に君のことは何と呼べばいい？名前がわからないようだし……」

「藤野秋也……さん。では以後、秋也さんと呼ばせて頂きます。あの、秋也さん。それで本当に宜しいのですか？男というものはそう

いった事を望んで止まない生き物だと私の知識の中にはあるのですが……。年はわかりません。でも、恐らく１６、１７歳辺りだとは思います。後、私のことは好きに呼んで下さい。今は自分でも名前がわかりませんし……」

二つ目のおかかのおにぎりに手を伸ばしてむしゃむしゃと食べながら正座状態の少女は俺に問いかける。

先程出会った時もそうであったが、何を考えているのかよく分からない娘である。

のんきなのか本気なのか、上手く判別できない。

そんな少女を前に、考えるのも何か面倒だと酒に酔った脳が指示してきた気がしたので、さらにグビグビと俺は酒を飲む。

多分、飲まなきゃこんな美少女前に会話を続けられないかもしれないし。うおっ、一気に酔いが回ってきた。月が二つに見えるぜ。

「なんでそういう知識はあるのに他の記憶は無いのか。まあ、いいや。じゃあ俺は特別な人間とでも思ってくれ。恥ずかしながらこの年になっても女性との経験は無い男なものでね、そういう行為には向いてないんだよ。後、名前。よし、今考えた！」

何を口走っているのか自分でもよく分からんが、取り敢えず普段言えないことを発したみたいで何か気分が良い。

名前、この少女の名前。そう、今考えた。安直故に主観的率直な感想。

この少女のダイレクトな印象。付ける名前があるとするなら……そう、これだ。

「舞（まい）。読んで字の如く、舞うという意味さ。これが君の名前。どう

？」

「舞……ですか。マイ、……マイ。とても良い響きです。何故か、懐かしくもあります。気に入りました。本当の名前が戻るまで、私の名前は舞と致します。この国らしい響きの名。承ったこと感謝します、秋也さん」

その瞬間、少女は――舞は、にこりと微笑んだ。

それは今宵の満月たる月夜に良く映えていて、俺の心を一瞬にして掴み取ってしまう程の可憐さを見せつけた。

――ああ、もしもこの時の俺が、例え酒に酔っていなくとも、だ。

どうしてこの少女の本質というものを見抜けただろうか。

良くも悪くも、俺は運命と呼ぶべきこの一つの道筋に辿り着いた。

後にどんな未来が待っているのかなど知りよう筈も無い。

ただきっとこの時の俺は他の何にでもない、この少女の存在自体に酔い知れていたのだろう。

これがこの物語の始まりの始まり。

異世界から来たという自称『誉れ高き高名な魔術師』の少女、マイ・マイム・ベサソ。

そしてこの俺、藤野秋也との関わりの発端の出来事であった。

＞i３７６５６―４７１９＜

第1話　月夜に酒飲み、少女は笑う。（後書き）

気長にお付き合い頂けたらこれ幸いです。

第2話　少女の記憶と、二人の暮らし。

「秋也さん、ご飯が出来ましたよ」

「おおっ。今日の夕飯は何かな」

俺と舞の出会いの日から、既に二週間が過ぎていた。

相変わらず俺以外の人間で彼女の姿を見れる人は誰も居ないようで、結局どこにも宛ての無い舞は我が家の家政婦状態で過ごしていた。

まあ、どちらかといえば、もはや主婦のような。

「麻婆豆腐か。うん。結構苦手な食べ物だな」

「我が儘言わないで下さい、秋也さん。私より美味しく料理も作れない癖に。苦手な物にも慣れて下さい」

へいへい、と相槌を打ちつつも、スプーンを片手に何だかんだで美味しいなと思いつつ食べる俺。

二週間も経てば、この関係にも大分慣れた。畏まった言葉を使いがちだった以前と比べれば、舞の言葉も大分フランクだ。

この二週間の生活と言えば、俺がどこかで適当に日雇いバイトをして、舞は俺のアパートに残って家事をするといった感じだ。

洗濯機の使い方や台所用品の使い方等は記憶に無い物だったようなので、それらを教えたら全て一回で覚えた。

更に料理の本を一冊買い与えたら、その後は見事なまでに美味しい料理を振る舞ってくれるようになった。

まあ、姿が見えないので材料を買い込むのは俺なんだけど。

藤野家の両親に勘当されてからは日雇いのバイトで適当に生活してきた俺だ。

それほど社交的でない俺に友人関係が特にあるわけでもない。それでもなんとなく生きてきた。

ああ、そういえば勘当されて以降は同窓会にも呼ばれていない。今の俺の住所も電話番号も、あいつら知らないだろうし。

俺から連絡を取れば良いだけなのだろうけど、そういうことも面倒で、しなかったからだな。

そんなこんなで割合孤独な生活を送ってきた自分にとって、舞という少女の存在が傍に居る生活は、本当に心躍るものだった。

「秋也さん。麻婆豆腐、辛いですか？」

「ん？いや、丁度良い位だよ。相変わらず舞は、料理のそういう配分は完璧だな。俺の味覚でも分かるのか？」

そういって俺はおどけて見せる。

まあ味覚云々は当然冗談なわけなのだが、そう疑いたくなる位に舞の作る料理は俺が丁度良く食べれる味付けになっている。

作る量も二人合わせてきっかり腹八分目位に近い。

よく気が付く女の子だと言ってしまえばそれまでだが、それだけでは計り知れない程の才知を舞が秘めているように俺は感じていた。

「それは良かったです。私は、程よさの完璧を目指すのが好きですから。秋也さんがそう言ってくれるのなら、頑張っているかいもあるというものです」

そう言って舞は誇らしげに笑ってくれる。全く、なんと可愛らしい事か。俺が舞を見ることが出来る存在でホントに良かった。

「実はと言うと、麻婆豆腐は私の好物なんです。だから、秋也さんにも好きになって貰わないと、私がこの料理を食べることが出来なくなっちゃいますから。だから作ったんですよ」

「あれ？四日前位に買い物カゴの中に麻婆豆腐を入れてた時は、この料理は知らないから買ってみるとか言ってなかったか？」

「……え？……そういえば、そんな事を言っていたような気もします。あれ、どうして私、麻婆豆腐の存在を忘れていたのでしょう？」

そうやって頭に手を添えて考えるような仕草をする舞。そう、この二週間を過ごしてきて、こういう事が幾度かあった。

今回のこれも、それらに該当するのだろう。

恐らくだが舞は、こんな感じで少しずつ記憶を取り戻している。

ほんのちょっとした事がきっかけで、かけられた施錠が一つ一つ

と開けられていくかのように。

焦っても記憶は戻るとは限らないし、焦ろうとすればするほど精神が不安定になっていく、という事が記憶消失になった人には起こりうるものだ。

「多分、舞の記憶に関係していることだからじゃないかな。麻婆豆腐が好物だったといことが、記憶を失う前の舞のルーツだったのかも知れない。まあ、単なる憶測なんだけどさ」

「うーん……。どうなのでしょう？でも確かに、何か、自分というものが戻ってきている感じは少ししました」

「そっか。じゃあこんな感じで生活していけば、きっといつかは舞の記憶も元通りになるかも、だな。ま、焦る必要は無いから、ゆっくり取り戻していこうか。何か分かったことがあったら、俺に教えてくれると嬉しいよ」

そう言うものの、俺の心境は中々に複雑なものであった。

確かに舞に最初に会った時には、早く記憶を取り戻させてあげようと思ったものだ。

けれど、考えてみるとだ。人が記憶を失う程の出来事となると、それは短絡的なものじゃない。

絶対に思い出しくない、触れたくない、心が壊れてしまいそうな位に追い詰められた時に、自分の心の防衛反応として記憶を壊すという例もあるのだ。

そうだとしたら、ただ記憶を取り戻せば良いというものではないだろう。

それと同時に、だ。舞が記憶を取り戻すという事は、俺の手元から離れていくことと同義でもある。

家族もいるかもしれない、友人もいるかもしれない。本当だったら彼氏なんてのも居るかもしれない。

彼氏がいたとしたら少し悲しいが、十歳以上も年の離れた良い大人が何を言ってるんだと突っ込まれそうなのでその発言は今は自重するとして、だ。

何故彼女の姿を見る事が今の所俺しか居ないのかは分からないが、それまでの彼女の人生では普通に誰からにでも見れる存在であったと俺は考えている。

そうでなければ誰が育てることが出来たと言うのか。なんにせよ、この年にもなれば出会いに別れがつきものだという事は、俺は重々承知している。

俺の傍から離れていくことは寂しい事ではあるが、それは世の常。後腐れも無いように、という意味も込めて、最初に宣言した通り、舞には夜の手出しもしていない。

いや、その点に関しては俺にそういう度胸が無いだけ、ということもあるけれど。

記憶を取り戻した時が俺から離れていく時なのだと思うと、少し、いや大分俺は躊躇してしまう。

たかだが二週間の付き合いで、と笑われることも分かっている。

けれども俺にとって、夢のような瞬間(とき)なのだ、舞と居る時間とい

うものは。

「秋也さん、お皿、お下げしますね」

「ん？あ、ああ。じゃあ皿洗い、頼むな」

「はい。任せて下さい。その位しか今の私には取り柄が有りませんからね」

そう自重気味に、けれども少し誇らしげに言って俺の目の前の皿を流しに持っていく舞。

今の舞の格好は、出会った時のままの服の上に、エプロンとなっている。当然食事や料理の祭であるので上着の振袖のような白い着物は脱いでいるのだけれども。

履いたスリッパの音をパタパタと鳴らしてテーブルと流し　を行き来する舞の姿は、どこか小動物の姿を連想させる。

大人びた言動の割には小柄な印象から、背丈は恐らく１５０センチ以下であると俺はみている。その様子を動物で表すのなら、リスといった所だろうか。

今は家事全般を舞に任せているので、俺が皿洗いや料理といったものを手伝うことは無い。

それは今の所、家事の役割を任せている舞に対する侮辱だと思うからだ。

任せた以上はキチンとやる。それが舞の信条、そして意思であるらしいし、記憶を失った者には何か自分を支える一つの基盤を用意

しなければならないと考えた故に。

自分は何者なのか。何をすればいいのか。自分を自分足らしめるものが無いとき、人はそれを欲しがるものだ。

だからこそ、俺は『秋也の代わりに家事を行う』という役割を与えたわけだ。というよりかは、元々は舞がそういう事をしたいと要求してきたわけなのだけれど。

そうやってやるべき事が出来たのなら。自分は何をすればいいのか、何をする者なのか。それが明確になる。右も左もわからなくなりそうな人を支える基盤と成り得る。

とまあ、これらは後々とって付けたような理由ととらえてもいい位に今の俺はただ横着してるだけのような気もするのだけれど。

テーブルの椅子に腰かけながら、俺は玄関付近の方に置いてあるテレビの報道にふと目をみやる。

やれ不景気だの自殺者数増加だの殺人事件だの。はっきり言って、そんな暗い報道には見飽きたと言ってもいい。

俺が生きてきた間は、バブル崩壊後の失われた１０年の就職難で命を絶った友人も少なからずいた。

今の御時世でもそれがあるというのは悲しいが、そんなことよりは明るい報道をもっと流して欲しいと思わずにはいられない。

余りに希望が無いではないか。

かくいう俺もフリーターであるわけだが、身持ちが居ない分には困っていない。

日雇いバイトでブラブラと生活しながら、持ち前の資金で株のネット売買で多少の儲けも出している。

まあ、そんな生活状態であるから、働いて家族持ちな奴らがいる同窓会に出ようなどという考えも薄れてしまうのはつまらない自分の矜持であるのだけれど。

少し溜息を吐いて、テーブルに顔を伏せた。今日は力仕事な工業系のバイトに出ていたので、身体は疲れている。

少し休もうかという位にそのまま目を閉じたら、いつの間にか寝てしまっていたらしい。

寝ぼけ眼で顔を上げ、背筋を伸ばしてみると、肩から毛布が地面に落ちた。

どうやら気を利かせてくれた舞が、俺の背中に毛布をかけていてくれたらしい。

全く、良く出来た娘である。

「あ。秋也さん、起きましたか？今日は疲れたみたいですね。お風呂は沸かしてあるので、どうぞ先に入ってください」

「ん。ああ、ありがとう、舞。じゃあお言葉に甘えて先に入らせて貰うよ。それと、毛布有難うな。よく気が付く」

「いえ、これも私の『役割』ですから。それに、秋也さんの寝顔を眺めているのも結構楽しいものですよ。普段と違って、凄く可愛いですし」

褒められたことに気分を良しとしたのか、満面の笑顔でそんなことを言う舞だが、言われるこちらとしてはそれは恥ずかしい。

後二週間ほどで二十台を終えてしまう男の年齢にしては、元々俺は童顔気味らしく、自分より年下の者に年下だと思われた事も幾度かあった。

その為普段は気合を入れた表情で生きようとしていることも有り、確かに寝てるときの無防備な様子は普段とは違って見えるかも知れない。

しかし可愛いとまで言われると、流石に恥ずかしく感じてしまうものだ。

「あ、そう言えば。一つ試してみたい言葉がありました」

「なんだ。言ってみてくれ」

「ご飯にしますか？お風呂にしますか？それとも、た・わ・し？」

不覚にも少し笑ってしまったのは、いつも真剣な舞が冗談を言う様子にギャップを感じたからだろうか。

その後風呂場に行ったら何故かタワシが一つ増えていたのは、奇妙な話である。

俺が風呂を出た時には、時刻は夜の１０時を回っていた。

風呂を出て身も心も颯爽とした気分になった俺は、スウェットに着替えて舞の所へと向かう。

すると、今度は舞が台所のテーブルの上に腕を乗せて眠っていた。
すぅすぅと寝息を吐きながらたまにむにゃむにゃと口を動かす様は、さながら小さな子供のようでとても可愛い。

こんなに気持ちよさそうに眠っている所を起こすのは少し罪悪感が生まれそうではあるのだが。

このままここに寝かせると風邪をひいてしまいそうなのでそれこそ後に罪の意識を感じてしまうことになるだろう。

そう思い、起こしてやるかと俺が舞に近づいた時だった。

健やかな寝顔の舞の頬に、一筋の涙が伝わり始めたのだ。

「……お母、様……。私、頑張るから……だから……心配、しないで……私は……マギ、だもの……」

寝言。珍しく彼女が零した、一つの言葉。これはきっと、彼女の記憶が夢に出ていることに他ならないのでないだろうか。

弱弱しくも、けれど秘めたる意思を言の葉に乗せたような、そんな舞の心の呟き。

彼女を起こすことに少しの躊躇を覚えてしまうものの、俺はやはり舞を起こすことにした。

「おーい、起きろ、舞。お風呂、次は舞の番だぞ」

肩を叩いて、舞の顔を俺は覗き込んだ。

うつらうつらとした目で俺の目を直視して、固まってから数秒後、はっと気付いたかのように舞は顔を赤くして飛び起きる。

「あ、秋也さん……？もしかして、私の寝顔、ずっと見てました……？」

「ずっとじゃないけど、少しだけ。舞の顔を眺めてるのも、結構楽しいものだよ。普段も可愛いけど、もっと可愛いし」

これはさっき俺が起きた時に言われた言葉の仕返しのようなものだ。

言う側も大分恥ずかしいが、言われる側も相当恥ずかしいものである。この恥ずかしさ、舞も味わえっ！

「ふ、ふぇっ！？あ、あのあのあの、その、は、……恥ずかしいでふ……」

最高潮に顔を赤く染め上げていく舞。なんだこの生き物。可愛すぎるぞ。どうしてくれるっ！

というか呂律が上手く回ってないぞ。大丈夫か、舞。

恥ずかしさに顔を手で覆う舞だが、その時自分でも気が付いたのか不思議そうな表情で、舞は涙で少し塗れた自分の手を見つめていた。

「あ、れ……？私、泣いていたのでしょうか……？秋也さん、さっき私、もしかすると、寝言で何か言ってたりしてませんでしたか……？」

「……ああ、言ってたよ。多分、舞の記憶に関することだ」

内容まで伝えるべきか少し迷ったものの、結局俺は先程の寝言を覚えている限りに一言一句違えず舞へと伝えることにしたのである。

「……お母様。それに、マギ、ですか……」

「ああ、そんなことを口走っていた。様付けで親を呼んでるってのは、なんだ、微妙に一般とは多少かけ離れた環境だったのかもしれないな。あと、マギってのも……」

「はい。その単語には、特別惹かれるものがあります。きっとそれが、私の記憶を辿るルーツだと、思います」

本人がそういうのならば、間違いないだろう。

ふむ、一つ明日やることが増えたな。明日は日雇いの仕事は無にして、ネットやら本やらでそれについて調べてみるとするか。

しかし、マギって単語。なんなんだろうな。マギ。マギー。マギーしんじ。はっ！

「マギってのはまさか、マジシャン……魔術師のことか……」

どういう発想の仕方なのかと自分でも気になるところだが、強ち（あながち）間違いでも無いだろう。寧ろ的を射ていると断定したい。

だが、その俺の呟きは、予想に反して舞には大きく影響した。

いや、先程の俺の行動は、事を急ぎ過ぎたと反省せねばならなか

ったと、自省の念に駆られる事態が起きてしまったのだ。

「魔術、師……？私が、私が、マギ……。魔術、師……あれ、どうして私、こんな所に？なんで？……ダメ、こんな所にいちゃダメ。探さなきゃ、探さなきゃ！私は――」

「お、おい、舞！？」

蒼白な表情を見せ、心ここに非ずな様子で言葉を発し、そして頭を抱えた後には、糸が切れたように舞は倒れ込みそうになった。

俺は咄嗟に出した腕で受け止めたが、舞の顔色は確実に悪くなっている。

しかも意識も無いような様子だ。

なんてことだ。なんの気兼ねも無く放った一言が、ここまで舞に負担をかけてしまうとは。

意識は無いようだが、呼吸音はしっかりと聞こえている。

抱きとめた腕に当たる舞の豊満な胸の奥から伝わる心音も、彼女がただ気を失っているだけだという事を教えてくれる。

俺はそこで、一つ安心して溜息を漏らした。

取り敢えず何よりもまず先に、舞を安静にさせるべきだ。

俺は舞をお姫様抱っこで担ぐと、自室へと足を運んだ。

アパートでありながら、さながらマンションの様な形式でもある俺の住居には、台所を除いて部屋が二つある。

いつもはもう片方の部屋に布団を敷いて舞は寝ているのだが、こういう状況だ。

俺が自室で寝ているベッドは中々に上質なもので、寝心地はかなり良い方だ。

そちらに舞を寝させた方が回復を期待できるだろうと考えた俺は、自分のベッドの上に舞を寝かせると、羽毛布団をかけてやった。

「無理させてごめん、舞……」

失念していた。記憶消失という状態である、この少女の繊細さを。俺の行動が余りに軽率だった。

何が保護者だ。彼女のことなんてこれっぽっちもわかっていなかった。

……いや、違う。わからないからこそ、ほんの少しのことでも彼女の口から聞きたいと思ってしまったのか、俺は。

ベッドに寝かせることが功をきしたのか、数分経つと舞の顔色も少し良くなってきていた。

この分なら、意識を取り戻すのも時間の問題だろう。自責の念に駆られながらも、俺は舞の寝るベッドに背中をもたれ、座り込んだ。

布団など無くても良い。今日は寝るつもりなど無いから。多少の寒さは我慢する。

取り敢えずは、舞が目覚めるまでは舞の傍に居よう。そう決めて、俺は振り向き、舞の小さな手を両手で握った。

こんなか弱い少女に何があったというのだろう。
何があって、他の人には姿が見えなくなったのだろう。
何があって、あの単語一つでここまで苦しむような記憶喪失になってしまったのだろう。

――知りたい。そして、この少女を助けたい。そう思ってしまった。

それが先程のようにこの少女を苦しめることになろうとも。

それは彼女の事を真に考えてなどない、完全なる俺のふざけたエゴ。

けれどそれは、今まで何も成しえなかった貧弱な自分がこの時抱いた、矛盾した確かな意志であった。

第3話　妹襲来、術師を語る。

俺が目を開けた時、夜は明けていた。

窓のカーテンからは日の光が差し込み、太陽が既に昇ったことを知らせている。

寝るつもりなど無かったのに、俺はその意思に反して、身体は休息を求めてしまっていたらしい。

全くもって、貧弱。俺にはこの言葉がよく似合う。そんな自分に、嫌気がさす。

壁に立てかけた時計の針を見ると、時刻は既に朝の九時を回っていた。

俺は舞の小さな暖かい手を離し、自室を出て台所へと向かった。

今日は舞のいつもの役割を奪ってしまうことになるが、こういう場合位は仕方がない。

俺は自分の手で久々に料理を作ることに決めた。

料理が苦手でコンビニ弁当に慣れてしまっているような俺が得意な料理はあまりない。

さて舞が起きた時の為にどんな物を作ればいいだろうかと冷蔵庫の扉を開けようとした時だった。

ピンポーンと我が住居のアパートのインターフォンが音を鳴らし

て響いたのである。

はてさて、こんな朝早くから一体どんな業者や勧誘の方が訪問してきたのかと玄関の扉に向かい、鍵を外してドアを開けると、だ。

そこにいたのは一人の茶髪の少女。

高校生辺りの年齢であり、先端が少しカールしている肩辺りにまでにかかる茶色の髪と、綺麗に整った可愛らしい顔が特徴な、――俺の妹であった。

「久しぶりね、秋にぃ。元気にしてた？」

「……ああ。久しぶりだな、椿。中々に唐突な訪問じゃないか」

「そうね。まあ、バイトの関係で京都に来たから、ついでに秋にぃの所に寄っていこうと思っただけなのだけれど。ほら、これ。手土産」

そう言って年の離れた俺の義理の妹、藤野椿（ふじのつばき）が差し出したのは、ヴィンテージ社というロゴの書かれたビニール袋に包まれた２０センチ位の箱状の品物。

それを受け取って中を見てみると、そこにあったのは、やはりというか、毎度の事ながら、俺に予想をさせない品物だった。

「ヴィンテージ・ヴァリアブル・ウォッカ……。確か、俺たちの地元の名産品の酒だったか。正直毎回反応に困ると言うか……いつも変な物ばかり持ってくるよな、椿は」

「なによ。気に入らないっていうのかしら？紋切型の普通過ぎる物を持ってくるよりは、秋にぃの虚を突く様な物の方が面白いと思うのだけれど」

「いや、まあ、酒は好きだから良いんだけどさ。まあ、取り敢えずありがとな、椿。感謝するよ」

「最初からそう言えば良いじゃない」

そう言って薄ら笑みを浮かべる椿だが、俺がこういう反応をすることなど最初から分かっていたのだろう。

俺が酒が好きだと言えども、真の好物は日本酒である。ウォッカの類は嫌いでは無いがそこまでは好きではない。

先ほどの俺の言葉も、毎回変な物ばかりを持ってくる椿に対するせめてもの社交辞令である。

まあ、可愛い妹が土産を持って俺の家を訪ねに来てくれたこと自体は凄く嬉しいことなのだけれど。

……しかし今日は平日なのだが、高校サボってバイトなのか。相変わらず自由だな、椿は。

俺と椿の関係を説明してみようと思う。

藤野家に養子として引き取られた俺とは違い、椿は藤野家の両親の実の娘だ。

俺を育ててくれた母親は、子が成せない身体であったが故に、父親と一緒に悩みに悩んで養子を取るという選択肢を取った。

そして俺という、当時赤ん坊であった俺という少年を特別養子として引き取ったのである。
特別養子となれば、権限は実子と同じ。

両親と血が繋がっていないという事実を知った後にも、多少の仲違いはあれどもスクスクと育っていた俺だったが、中学生に入学した頃。突然の脳腫瘍で俺の母親は亡くなった。

そしてその後再婚した父と、その母が成した子供が二人。

その内の次女に当たるのが、今俺のアパートを訪れに来た椿だ。

そんな新しく再婚した若い母との仲違いから勘当されることとなった俺だが、なんやかんやで唯一、今でも椿とだけは仲が良い。

幼い頃から一緒に遊んでやったし、話も気が合うというか、そんな感じであり、たまにこうやってわざわざ遠い京都まで足を運んで俺の様子を見に来てくれるのだった。

因みに椿の少しおかしな口調についてだが、中学生になってから高校生である今に続いて、ずっとそうである。

今風に言うのなら、所謂(いわゆる)その頃に始まった厨二病とやらを引き患ったままでいるのではないかと俺は思っている。
というか本人が昔認めていたし、実はこの椿という俺の妹は、ファンタジーな小説を好んだりする、厨二病大好き少女なのであった。

ここまで来るのにも少し疲れたわ、と一息漏らしながら椿は部屋の入口に荷物を下ろすと、立ちながら靴を脱ぎ始めた。

「じゃあ、お邪魔させて貰うわね。秋にぃの部屋、一人暮らしにしてはかなり綺麗だから、そこだけは褒めてあげれるかも知れないわ」

「ん。まあ、元々俺は綺麗好きだしな。……っておい、勝手に入るなよ！」

脱いだ靴の向きを揃えた後に、置いた荷物を手に持って台所へと向かおうとする椿だったが、俺のその呼び声に足を止めた。

そして不思議そうな表情で俺の方へと振り返る。

「……？何かしら。まさか、見られたくないものでもあるの？別に秋にぃのどんなものを見たって今さら私は驚かないし、なじったりはしないわよ」

「ああ、いや、まあ、そうなんだろうけど……。まあ、いいや。じゃあ、ちょっとだけ台所でテレビでも見て待っててくれないか？そういや俺、寝間着のままだし」

「ああ、そう言えばそうね。でも後で、北野天満宮……だったかしら。近いみたいだし折角京都に来たんだから秋にぃにはそこに案内してもらうつもりなの。だから余り変な格好に着替えないで欲しいわ」

寝間着云々は取り敢えず椿が余計なことをする前に舞の様子を見るために言った咄嗟の言葉だったのだが、まさかそんな事を言われるとは。

まあ、恐らくは椿にも舞の姿は見る事が出来ないとは思うのだが、

出かけることを提案されるとなると話はまた変わる。

今の舞を一人で置いていくことなんて、俺には出来ないからだ。

……しかし、よくよく考えてみると、もしかしたら椿にも舞が見えてもおかしくなさそうな気もしなくはない。

ファンタジーが好きな事もあってかは知らないが、昔からそういった不思議な出来事や現象には案外と敏感な面も椿は持っているからである。

言葉通り椿には台所でテレビを見て待って貰うことにして、俺は昨日舞を寝かせた自室へと向かう。

自室のドアを開けると、そこにはケロリとした表情で既にいつもの服に白い振袖の着物を着てベッドに腰掛けている舞の姿があった。

「あ、……舞！もう起きて大丈夫なのか？気分は悪くないか？頭が痛かったりはしないか？」

ベッドに腰掛ける舞に近づき、なるべく小声でそう話しかける俺。

舞の姿が見えない者には舞の声が聞こえないことは出会った初日にコンビニで試したから知っている。

けれど俺の声は台所にいる椿に聞こえることだろう。

部屋に居る誰かと話しているのかと聞かれて誰も居ないのに自分の兄は独り言を呟くようになってしまったのかと思われては堪らないし、余り舞のことを詮索されたくはない。

「はい、大丈夫です。一晩寝たら、すっきりと回復したみたいです。

……そ、その、秋也さんのベッドを借りてしまってたみたいで、……申し訳ありませんでした」

そう言って律儀にペコリと頭を下げる舞。ああもう、どうしてこの娘は、ここまで礼儀正しいのだろうか。

「いいよ、そんなのは気にしなくていい。舞が良くなることが俺にとって最優先だったから。ああっと……その、すまん。昨日は、少し無理させた」

「……いえ、無理、という訳では有りません。私がまた記憶の断片を取り戻す大きなきっかけになりましたから、寧ろ感謝しています。それに、少しだけ思い出せました。マギ……私が、魔術師だということを」

瞬間、俺の思考が止まった。

昨日は、余り考えないようにしていた事実。調べようとは思っていたこそすれども、魔術師という実際生活では聞き慣れない言葉が脳内を走る。

彼女が、この目の前の少女が、魔術師などという稀有な存在であるということ。

そんな存在が居る事など、舞と出会うまでは半信半疑だった俺だが、俺以外に姿を認識されないという特異な現象を実際に引き起こしていた舞の言葉だ。

それを鑑みれば、これもまた、有り得ない話では無い。

「ですが、思い出したのは私が魔術師であるということと、後もう一つ、何か、私が探しているモノがあったという事だけです。しっかりとしたことまでは、まだ……」

「良い。焦る必要は無いだろう。ゆっくりとしていけば良い。そうでなきゃ、また昨日みたいな事態をまた引き起こすかもしれない」

「……魔術師っていう存在のことに関しては、触れないんですね、秋也さん。信じているのか、私の言う事がただの戯言だと思っているのかは知れませんけど……。因みに今の私は殆ど魔術が使えないので、証拠を見せろって言われても、見せられないですから……。いくら秋也さんでも、こんな話、信じられるわけ無いですよね」

「――いや、信じるさ。俺は舞が魔術師だと信じる。戯言？舞がそんな表情で言う言葉に嘘なんてあるのものか。会ってまだ二週間しか経ってはいないが、その位のことは俺にだって分かる」

半信半疑に疑う自分なんてのは、もういい。

俺はこれまでの経験と舞の表情、そしてその言葉を聞いて判断し、そしてそれを信じた。

魔術師という存在は、この世に実在する。

我ながら安直、そして愚直なまでに妄信的な判断だ。客観的に見れば、何を世迷言をとのたまう現実主義者（リアリスト）もいるだろう。

だが残念。俺は適当に見上げた月夜が最も美しいモノだと決めつけて月桂冠と共に少女と月見をしようとするロマンチストだ。

舞が自分自身を真剣な表情で魔術師と呼び、そして実際に一個体

として身体を持ちながら姿を人に認識されない状況にある以上、それを疑う余地が俺には無いのだ。

俺のその言葉を聞いた舞は驚いた表情を見せた。

そして真っ直ぐに舞を見る俺の目を見て、先程の俺の答えが嘘では無いと感じたのか、舞は表情を緩めた。

「……私のこんな突拍子も無い話を、本当に信じてくれるんですね、秋也さん。ただ記憶が混同していて、ただ妄想を信じてるだけの頭の弱い子だって思われても仕方が無いのに。正直者は馬鹿を見るって事もあるんですよ？……でも、凄く嬉しいです」

そう言って舞は、にこやかに笑った。

笑うと同時に、彼女の銀の髪がさらりと揺れる。

ああ、そうだ。見惚れてしまう、聞き惚れてしまう。

その舞の素直な笑顔に。

その清んだ、嬉しげな声に。

けれども何かを思い出したかのように、その舞の表情が瞬間的に冷えたものに変わる。

舞は感情の表現が率直だ。

だからこれは、何か俺を非難することがあるというサインだと思われる。

「そういえば、秋也さん。先程誰かがこの家に来て二人で話していたみたいですけど……今台所に居るらしい女の人は……誰、ですか

？」

そう言いながら、今度は頬を膨らませる。更に今度は、多少俺を睨みつけるような視線。

……これは、あれか。まさか、俗に言う嫉妬という奴でしょうか。

そうだとしたらなんと嬉しいことかと思うが、俺の年齢を考えて冷静になる。まあ……そりゃ、無いかな。どうだろう。

「あ、ああ、そうだな。まだ言ってなかった。今来てるのは、俺の妹。血が繋がってない上に俺は勘当された身であるから、義理の妹という感じな訳だけども、俺は実の妹のように思ってる。椿（つばき）って名前の、少し変わった面白いやつさ」

それを聞くと、舞はキョトンとした様子になって、それからほうっと一息つくと、先程の様な乾いた笑顔を見せてくれた。

なんというか……本当にわかりやすいな、舞は。

「な、成程、妹さんだったんですか。えっと……不法侵入者さんじゃなくて、良かったです。それで秋也さん、先程椿さんとの会話が聞こえていたのですが、天満宮……？でしたっけ。これからそこに行くのですか？」

「うん、まあ。そのつもり。舞がまだ体調が悪くて目が覚めてない様だったら、断るつもりだったけどな」

「あの……でしたら、私も連れて行ってくれませんか？その、……椿さんと、一緒に」

それは思わぬ提案であった。

正直な所俺は、昨日の負担があるだろうから今日は舞には休んで貰おうと考えていたのだが、まさか自分からそういった所に行きたいと言い出すとは。

「ああ、いいぞ。観光したいなら、舞も一緒に行こうか。でも椿には舞の姿は見えないから、殆ど舞には構えないと思うけど、それで良いなら」

「構いません。着いていけるだけで、充分です。じゃあ、えっと。秋也さん。そろそろ着替えないと、椿さんが怒りそうなので……私、後ろ向いてますから、その内に着替えちゃって下さい」

……そういえば。完全にその事を忘れていた。

緑のボトムにTシャツ。その上に黒のジャケットという、何となく若者風なチョイスの服に俺は決定した。

ファッションのセンス？そんなものは知らない。椿に怒られない程度なら問題ない筈だ。

高校生である椿の隣を歩くなら、下手におっさんっぽくするよりかは若くした方が良いだろう。

援交とかだと周りに思われたらたまらん。そうなれば椿が可哀相であるからして。

元々割合と自分は童顔であるので、そこまで違和感も無い気がしているのが若干虚しいと言えば虚しい。

着替えた後に支度を終えた俺は、俺の隣にちょこんと着いてくる舞と、その反対側を歩く椿と共に出発することにした。

椿の様子を見るに、舞の姿に気付いている様子は無い。

これなら問題ないだろう、と俺は内心ほっとしていた。

しかし一瞬椿が舞と目を合わせたような所作も見えたような気もして、もしかしたらという気にもなったが、気のせいだろうと俺は頭を振りかぶった。

そうして俺達は、北野天満宮という学問の神様を祭る、受験を控えた修学旅行生が良く訪れる名所へと向かうのであった。

初めて舞と出会った場所である最寄りの神社の前を左に曲がった道の先に、天満宮の裏門が存在している。

俺としては散歩コース並みに慣れた場所であるので数分程歩いた後に到着し、遠慮なくその裏門から入っていくことにした。

「ふーん。良く思い出してみれば修学旅行で昔ここに来たことはあったような気もするけれど、こんな裏道みたいな門があったことは知らなかったわ」

「まあ、そりゃそうだろ。修学旅行生は時間的に制約が有ったりするし、第一バスが近くに出てるかも分からないこんな場所を入口や出口にする修学旅行生がいたら、相当な手練れだと思うぞ」

そんなの事の手練れな修学旅行生とは一体何者なのかと少し疑わしく思いたくなるようなものでもあるのだけれど。

あ、元現地人なら有り得るか。

門をくぐって暫くすると、本殿の建物の裏側が見え、そしてその近くに赤い様式の控え目な社が立ち並ぶ様子が見える。

「そういや、なんで椿はここに来ようと思ったんだ？別に他の場所でも良かっただろうに」

「秋にぃの家から近いっていうのと、期間限定で秋の紅葉が見られるもみじ苑があるって聞いたからよ。なんだかそういうのを眺めるのって、素敵だと思わない？」

流石我が妹。実は俺もそういうのが結構好きである。風流だとか考えて月見酒をするような奴だしな、俺。

やはりこういう所で気が合ったりするからこそ、俺と椿は今でも仲が良いのだろう。

正門を出て暫くすると、その紅葉苑の入り口が目に入る。

入苑参拝量大人六百円。茶菓子付きでその値段だというので、それほど高くも無い気がする。

当然その支払いは俺持ちであるけれど。

因みに例によって舞の姿は認識されていないので、舞の分のお金は払う必要は無い。

というより、居もしないと受付の人に思われている舞の分の代金なんて払いようがない。

そんな折に舞は楽しそうな笑みを浮かべながらも、その視線は椿の方へ向いていた。
何か思う所があるのだろうか、どうにも舞は椿を意識しているようにも感じられる。

お金を払い、勘定を終えてそちらに入ると、椿がぼそっと一言呟いたのが聞こえた。

「……１２００円で、二人……ね」

意味深そうな椿の発言に、俺は首をかしげる。

「……なんだ、高いとでも思って遠慮してんのか？京都じゃ安い方だから気にするなって」

「私が秋にぃに遠慮するわけないじゃない。そういうことじゃないのだけれど……まあ、いいわ。誰も困りはしないでしょうし」

「……？」

よく分からないが、取り敢えずその時は頷いておくことにした。

▼

その後紅葉苑の道を周り終えた感想としては、ただ一言に尽きる。本当に綺麗だった。

こういった場所に来ることを椿に提案されたことは、僥倖であったかもしれない。

「正直、想像以上だったわ。バイトのついでとはいえ、来て本当に良かったかも知れないと思えたのは、素晴らしいことね」

「俺もそれには同意。秀吉が作ったという御土居（おどい）の近くにかかる橋なんて、まさに和って感じだったしな」

椿の反対側で俺の隣を歩く舞に目を見やると、私もそう思いますと言わんばかりに嬉しそうな顔で頷いていた。

今は歩きながら、正門を出た方からのバス亭に向かっている途中だ。

今日は椿は、そこに着いたらお別れだという。

その事を俺の横で聞いた舞は、俺に一つお願いと称して、椿に質問をすることを頼んできた。

内容を聞いて、成る程、その為にも舞は着いてきたのかと俺は少し納得した。

要するに舞は、椿に魔術師についての見解を聞きたかったらしい。

「なあ椿、聞きたいことがあるんだけどさ」

「なにかしら。答えられる範囲までなら大抵の事は答えるわよ」

「それじゃあ聞くが、『魔術師』ってどんなものなのか、教えてくれないか？」

それを聞いた瞬間、椿の表情は一変した。

それは驚愕か、はたまた椿が好きそうな内容に突っ込んだことに対する密かな歓喜からか。

そして何か悩むような様子を見せた後、椿は俺に視線を合わせると、ふっと笑った。

「何？秋にぃもそういうことに興味が出てきたのかしら。うん……魔術師、ね。私が今まで読んできたファンタジー系統の小説や文献からしてだけれど、二パターンの考え方の存在があると思って良いわ」

二パターンもあるとは。中々興味部深そうな内容である。

相当なまでにそういう事が好きで色々調べていた椿の言葉であるなら、例え虚構の物語から手に入れた知識だとしても参考になることは充分にあるかもしれない。

「まず一つ目。私が昔から興味があった、タロットにおける魔術師の見解からいかせて貰うわ」

「ああ、じゃあまずはそれで頼む。……そういや椿は、昔からタロットで占いとかそういうの好きだったな。その点は凄く女子らしいと言うかなんというか」

「秋にぃ。聞く立場なら余計なことは言わなくていいわ」

はぁ、と呆れたように溜息を吐くと、椿は気を取り直して話始めた。

「じゃあまずは一つ目。タロットにおける魔術師という存在の見解ね。結論から言わせて貰うと、タロットにおける魔術師というのは魔術の行使においては『ペテン師』だと思ってくれて構わないわ」

ペテン師、ね。魔術師とやらは嘘吐きなのか？……そんな馬鹿な。

「まず前提として、タロットには正位置と逆位置というものが存在しているの。大アルカナでいう一番目の数字を冠する『魔術師』で言えば、逆位置の意味は『ペテン師』という具合に」

ふむふむと俺は頷き、舞は俺の隣で身を乗り出してその話を聞いている状態である。

「０番目を冠している『愚者』のカードを除くと、２１枚のタロットの中間に位置してバランサーの役割を果たしている『正義』を中心に見立てた時。『魔術師』と相反する位置にあるのは『世界』のカードなの」

……えっと、つまり、タロットにおいて、世界と魔術師はお互いに対立してるということだろうか。

俺がそう聞くと、「そう思ってくれても構わないわ」と椿は答えて、そのまま話を続けた。

「魔術師というのは、世に有り得ぬことを現実のものとして顕現する者のこと。事欠いて、魔術というのは私達が生きている世界の法則に背くものなのよ。そう、カードで例えたように、それは魔術師が世界と相反した存在だからこそ成せる業」

成る程、とここで俺は納得してしまう。そういう考え方もあるのか。

「例えば『炎よ、出ろ』なんて宣言したとするわね。そこに魔力を込めることで、魔術は実際に、炎を世に顕現する」

炎を実際に現実でそんな風に出すことなど、中々イメージが沸かないので、それを聞いた俺はやっていたようなアニメや、イギリスの有名な魔法使いの映画のシーンを脳内に浮かべてみた。

「魔力とはすなわち、世界を酔わせるお酒のようなものよ。世界そのものをお酒で酔わせて、詠唱という嘘をつく。そうすることで世界を騙して、炎を世に顕現する。そう、まさしくペテン師なのよ、魔術師という存在はね」

ま、これは殆ど私独自の見解なのだけれど、と椿はあくまで持論であることを主張するアフターフォローを忘れない。

だがしかし、中々参考になった。

タロットにおける魔術師をそういう目で見る事で、魔術がどう行使されるのかというイメージは少しついた。

ただ、この椿の解釈をうのみにするなら、今まで抱いていた魔術師という者に対するイメージが少し壊れたという気も否めないが。

「さて、じゃあ二つ目の解釈ね。これは一般的な魔術師に関する見解。さっきのは寧ろ例外だと思ってくれて構わないわ」

今のが例外なのか。だとしたら、二つ目の方が寧ろ普遍的な魔術師を指すモノということになるのだろうか。

「一般的な魔術師というのは、結論で言えば、『商売における消費者』よ。それもかなり立場の低い、ね。それは、世界は一文(いちもん)たりとも、魔術師から提供される魔力の量をマケてはくれないが故よ」

まさかの消費者。ついにファンタジーな影すら消えてしまったのか。

「その場合の魔術師の定義は、魔導と魔操を扱う者のこと。魔導とは、魔力で『魔導陣という名の契約書』を描き、その魔術に定められた一定量の『魔力という名のお金』を提供して、世界から魔の力を導く業よ」

世界が売り手で、魔術師が買い手。魔導陣が契約書で、魔力がお金ね。

分かり辛いが、なんとなく理解した。

「世界は魔導陣に対応してその魔力に見合った魔術を提供するけれども、提供したその魔力の量を超える魔術は一切提供しないわ。つまり、魔導陣という契約書を描く側が未熟であれば、余剰分の魔力は全部世界に持ってかれてしまうのよ」

それはつまり、売る側（世界）はお金（魔力）が払われた分だけの商品（魔術）を渡す義務は一応生じるということである。

ただし買う側（魔術師）が契約書（魔導陣）に欲しい物を正確に全てに書けなかった場合は。

売る側（世界）は書かれなかった分の商品（魔術）を提供する必

要が無くて、払われた残りのお金（魔力）をそのまま徴収できるってことか？

なんという理不尽な商売。だが、だからこそ買い手の実力が試される、ということだろうか。

分かったようで分からないような……。

この長ったらしい話を舞は理解できたのだろうかと横を少し振り向いてみると、舞は納得したように頷いていた。

本物の魔術師が頷いているということは、この椿の説明はあながち間違いではないのだろうか。

「ま、大方の説明はこれで終わりね。魔操については、読んで字の如く魔の力を操る業とでも思っていればいいと思うわよ」

「纏めると、この魔導と魔操を行う力を兼ね備える、世界に対して立場の低い消費者。それが一般的な魔術師ってことね。長かったけど、理解出来たかしら？」

取り敢えず大枠は理解した。

結論として、魔術師というのは『世界を騙すペテン師』と『世界より低い立場の消費者』の二つに分かれているって話だな。

舞が言う魔術師とはどちらなのか、気になるところだ。後で聞いてみよう。

そんなこんなで長話をしていると、いつの間にやら近くのバス停まで辿りついていた。

会話というのは時間を忘れてしまう。実(げ)に恐ろしいものだ。

車の道路側の車線の方にふと目を見やると、バスが既にこちらに向かっていた。

「ああ、あれが私が今から乗るバスみたいね。秋にぃとこういう会話が出来たのは凄く有意義だったわ。最後に一つだけ。昨日、秋にぃの今後をタロットで占ってみたら出たカード。なんだと思う？」

「……わからんさ。正直そこまでタロットについて覚えてないからな。じゃあ、とりあえず愚者で」

俺がそう言ったタイミングで、椿が乗る予定のバスが着いた。

プシューと音を立てて、その扉が開く。

「……残念、はずれ。秋にぃ、覚えて置いて。出たのは『世界』の『逆位置』よ。普通に読み取れば最悪のカードだけれど、秋にぃにとっては、これにはきっと大きな意味があるわ」

そう言い残すと俺の方を向きながら、椿はバスに飛び乗った。

そして今日一番の笑顔を見せると、最後にこう言うのだった。

「『彼女』とお幸せに。頑張ってね、秋にぃ。それじゃあ、またね」

第3話　妹襲来、術師を語る。（後書き）

現代ファンタジーとしては、基本的に京都が舞台です。
何故京都かと問われれば、作者の住居がそこにあるからっ！
（つまりは、描写しやすいのです。それだけです）

第４話　想いを神楽に、舞は舞う。

今俺と舞は、俺の住居に戻って二人で食事中である。

最後にとんでもない言葉を残して去った椿と別れた後、舞の腹の虫がくぅと聞こえてきたこともあり。

よくよく考えてみれば舞と俺は朝食を食べていないことを思い出した俺は、直ぐ様帰ることとしたのである。

舞自身朝食を抜いていたことを忘れていたようなので、お互い両成敗だとして笑い合うこととなった。

家まで歩いて徒歩１０分はかかるものの、それほど大した距離でも無い。

多少緩やかな坂を上っていくような道なりだが、基本的にバイト等で身体を鍛えている俺の障害には成り得ない。

舞も華奢な見掛けに反して中々に体力がある。それも少し不思議ではあるのだが、舞の非凡さは今に始まったことでも無い。

たまに鳴り響くお腹を恥ずかしそうに抑える舞を微笑ましく思いながら、俺達は帰宅したのであった。

「うん。やっぱ舞の作る料理は最高だな。めっちゃ美味い」

「料理といっても、味噌汁とご飯と目玉焼きを焼いただけなんです

けど……」

「それだけでも充分に俺とは差が出てる。俺にはこんな風に美味しく味噌汁をつくることなんて出来ないし、目玉焼きをこんなに綺麗な焼き加減で作ることも出来ないさ」

そういって俺は舞の頭を撫でてやる。

さらさらとした銀の髪が心地よい。

良いことをしたら褒めてやる。それが大人の対応……って、どうにも俺は舞を子供として見過ぎているような傾向がある。

年齢的には舞は高校生辺りなのだし、こういった行動は馬鹿にしてるように思われるんじゃないだろうか。

そういった行動に出ると、舞は恥ずかしそうに眼を伏せるのだが、途中で何かを思い出したような表情をすると、頭に置いた俺の手を咄嗟に払いのけたのである。

正直、予想外だった。

ああ、やっぱりこれは止めた方が良かったかな、と少し申し訳なく思った所だったが。

俺の表情を見ると、舞は焦った様子でそれを言わずとも否定した。

「あ、あの、違うんです。頭を撫でられることが嫌ってわけじゃなくて、その、寧ろ嬉しいのですけど……。何分、私、昨日お風呂に入る前に寝ちゃったじゃないですか。だから、私の髪が秋也さんの手を汚しちゃうんじゃないかと思って……」

そう言って舞は顔を赤くして俯いてしまった。

ああ、そうか。これは俺の配慮が足りなかった。

舞は純粋な女の子である。そういうことを気にするのことも考えてあげなければいけなかった。

女性関係なんてものが皆無だった俺には余りに繊細過ぎて察することの出来ないという事実。

本当に情けないな、俺は……。

けれど、撫でられること自体は嫌いじゃないということも分かったので、後でまた撫でてあげたいとも思った。

けれども何よりその瞬間は、そんな可愛らしい舞の様子に、また舞を女の子として意識し過ぎそうになった自分を落ち着かせる必要があったのだけれど。

流石にこの時間から湯を沸かすことは遠慮してシャワーにしたようだが、その後着替え終わったらしい舞が洗面所のドライヤーで髪を乾かしているその間。

俺はノートパソコンを立ち上げると、ネットを使って魔術師について調べていた。

ファンタジーな世界を形成するのに重要な素材である。

勿論、電脳の世界では様々な憶測や見解、ゲームや小説の内容などが飛び交っていたのだが……。

「正直な所、どうにも椿の言葉が一番納得できたんだよな……」

つい、呟いてしまう。

抽象的すぎてよく分からない魔術というものを、別のものに例えて割合具体的にしようとしていた椿の説明は頭に残ったこともあり、何よりファンタジーについては詳しい椿の事である。

そういった自分の意見には自信がある筈だし、一番これが近しいものだと思ったものを言った筈である。

で、あるならば。調べるのはそれよりも魔導や魔操といったものの方だろうか。

そう思いそれらを調べてみるが、めぼしい情報は手に入らない。そもそも、秘匿にされそうな本物の魔術師の情報など、ネットに上がっているものなのだろうか？

「何をしているんですか？秋也さん」

俺が検索に集中している間にどうやら髪を乾かし終えたらしい舞が、いつの間にか俺の隣で画面を覗き込んでいた。

風呂上りの女の子のとても良い匂いが香ってくるのだが、邪な感情は一瞬で振り払う。

中々これは刺激が強い……。

「今は、魔術師について色々とこれで調べてたんだ。といっても、情報が散漫してるが故に正しい情報かわからないし、良さそうなものも手に入らないのだけれど。さっきの椿の話が一番しっくりきた

かなって感じだ」

「そうなんですか。その道具、凄いんですね。そういったもの調べられるのですか。……でも秋也さん。凄く有り難いのですけれど、魔術師に関してはそういう事をする必要ももう特にないです」

「……え？」

寝耳に水だった。まさか、もう既に、舞の記憶は殆ど戻っているのだろうか。

「先程の椿さんの話を隣で聞いていて、魔術師のことについては殆ど思い出しましたから。逆に秋也さんが聞きたいことがあれば、私に聞いてくれれば答えられるレベルにまで」

と、なるとだ。いよいよ俺と舞との生活の終わりが近づいているということだろうか。

それは胸が引き裂かれそうな位に俺にとっては辛い現実であり、自分の中の焦燥感を一瞬にして駆り立てた。

……まて、俺は何に焦っている。舞が記憶を取り戻すことの手伝いをするのは、俺が望んだことじゃないか。

昨日（さくじつ）も思ったはずだ、舞を助けたい、と。

そして知りたいと願ったはずだ、この少女の事を。

これは寧ろ、喜ばしいことの筈だ。

考えてもみろ、こんな可愛い少女が、俺と二人で暮らしていることがおかしいのだ。
そんな状況で本来の舞の意志でなくここに居て貰うのは、フェアじゃない。

もしも記憶を取り戻して舞が、俺の傍から離れて行ったとしてもだ。きっとそれは、俺と舞との運命なのだ。

――運、命？一体、なんのだ？

「……秋也さん？だ、大丈夫ですか？額から汗が出てますし、顔色も悪くなっています。疲れているのなら、休まれた方が……」

舞のその言葉に、はっと我に返る。
動揺の余り、身体までもが異常をきたしていたようだった。何を、やってるんだ。俺は。

「……いや、大丈夫だ。なあ、舞。それなら、もう自分のことについても思い出したのか？」

「いえ、それはまだ。魔術師としてのことは思い出しましたけど、私の名前や、故郷のことについては、まだ……」

そう言って、少し辛そうな表情で舞はこんな言葉を続けた。

「……御免なさい。迷惑ですよね、秋也さんの所に、もう既に二週間も居座り続けて。早く記憶を取り戻して、秋也さんの負担を減らしたいのに……」

その言葉を聞いて、俺の中の何かが切れた。愕然とした。

俺は舞に、そんな風に思わせてしまっていたのか。
不甲斐なさに、唇を噛み締める。
その時俺は初めて、舞を叱るとにした。
だが、本当に殴りたいのは、自分自身だった。
言葉で伝えなかったが故に、知らず知らずの内に俺は舞を不安にさせていたのだから。
「舞、君は大馬鹿だ。誰がいつ、迷惑だなんて言った。誰が君の存在を負担だなんて言った。そんなわけ無いだろう」
舞は、驚いた顔でその言葉を聞く。何を驚く必要がある。どうしてそんな風に思う必要が有る。
ああ、そんなの分かってることだ。俺が面と向かって今まで舞に伝えなかったからだろう。
「俺は、舞が今もこうして隣に居てくれることが凄く嬉しい。本当に楽しい。一緒に居るのが、とても幸せなんだ。舞なしじゃ、俺は――」
そう言いかけて、はっと口を噤む（つぐむ）。待て。俺は今、なんて言おうとした？
「……え、あ、あの、ごめん、なさい。あ、秋也さんがそんな風に思ってくれてるだなんて、私思って無くて……。……その、凄く、……凄く嬉しいです」
俺のその言葉を聞くと、そう言って、舞は本当に嬉しそうな笑顔

を見せてくれた。けれど、感情的にもなったのか、それと同時にその頬には、一筋の涙が伝わり始めていた。

そんな自分に気付いたようで、慌てて舞は白い振袖の裾で顔を拭う。

その涙の意味は何なのか。嬉しさの余りに、出た感情なのか、それとも、別の何かか。

目の前の少女に対する愛おしさを感じると共に。

――俺は、先程自分が放った言葉の意味に気付き、自らを殺したくなった。

▼

道行く人は誰も知らない。この俺の隣を歩く、少女の存在を。

去りゆく者は見向きもしない。手を繋ぎながら俺と二人で歩く、舞の姿を。

自分という存在の卑しさを思い知った、正午は過ぎ。

現在昼下がりの時刻は二時。俺と舞は、今二人で大通りの歩道を歩いていた。

今日は平日だ。

この時間帯の車の通りは、まだ少ない方だ。近くに乱立する大学へ向かい、もしくは帰っていく大学生の乗ったチャリが俺達の横を行きかっている。

舞の小柄な右手と俺の左手を繋ぎながらの歩みは、何物にも代えがたい幸せな時間だ。

別にどこかに向かっているわけでも無い。ただ、街をまわりに歩いているだけ。

観光と言えばそうかもしれない。

朝は椿との三人で出かけたから、今度は二人で周りたいという舞の言葉を聞きいれて、今はただ、宛ても無く歩む。

エスコートなんて大層なものも出来やしない。けれど、それだけで十分だ、と舞は微笑むのだった。

ふいに、目の前に俺の右側を通り過ぎようとする自転車に乗った大学生らしき男の姿が目に入った。

俺の右手には舞が居るにも関わらず、そのまま突っ切ろうとするその男。

一体何だと思ったら、そう言えば舞の姿は誰にも見えていないんだったと気付いたのはぶつかりそうになる三秒前。

俺は舞の手を引くと、俺の方へと抱き寄せた。

何事もなかったかのように、先程まで舞が居た所を過ぎていく自転車。

「す、すみません、秋也さん。私、ぼうっとしていて、前の自転車に気付いていませんでした」

「いや、いいよ。……でも、後ろからああいうのに来られた時は少し怖いから、小通りの方へと戻ろうか」

俺のその言葉に頷くと、舞は少し頬を赤く染めて、俺の腕の中から離れた。

そしてまた手を繋いだまま先へと歩み出す。どうやら今からは、舞がエスコートするつもりらしい。

情けないかなと思いつつも、未だに俺は先程抱いた負の感情を思い出してしまい、それに抗えないでいた。

『舞なしじゃ、俺は――』なんだと言うのだろう。

言いかけたあの言葉の真意。

あれは自分に言おうとしていた言葉じゃない。

あの時の俺はきっと、敢えて舞にそれ聞かせようとしていたのだ。

それでどうして欲しかったのか。

分かってる、それは、くだらない俺の我が儘なんだってことは。

ただ、舞に一言いってほしかっただけなのだろう。

――私もそうです、と。

少し坂を下って行くと、平野神社と書かれた看板とともに、その赤い鳥居が見えた。

舞は俺の手を引き、その鳥居をくぐり、春は桜に包まれるであろう木々の間にある平石の上の道を進んでいく。

小鳥の囀りが聞こえる。進む先に見えるのは、神社には良くある、手を清める水の流れる手水舎（てみずや）と大きなイチョウの木。

秋の終わりを感じさせるように、イチョウの木からははらはらと黄色の葉が舞い落ちていた。

その右手に見えるのは、木製の常夜燈が立ち並ぶ先にある大きな鳥居。

そう、ここは俺と舞が二週間前、初めて出会った神社だった。

「ここが、私が秋也さんと初めて会った場所ですよね。私、しっかりと覚えてます。二週間前のあの日のこと。気が付いたら知らない所に居て、ずっと誰も私の事に気付いてくれなくて、数日が過ぎていた、あの日の夜。悲しくて、寂しくて、茫然とあの鳥居の奥に立ち尽くしていて――」

舞はその時のことを反芻するかのように目を閉じ、右手で胸に手を当て。そして、口元に笑みをともした。

「そんな時、そんな私に唯一気付いた視線を送ってくれた、秋也さんの姿があって。……その視線さえも半信半疑でした。何度過ぎゆく人に話しかけても反応されなくて、触れてみたら気味悪がれて。だから、心の中では本当に、嬉しくて堪らなかったんです、私の声に応えてくれたことが」

そんな風に思っていたなんてことは、初めて知ったし、初めて聞いた。

そういえば、出会った時の舞は、身体を許してでも孤独には敵わないという意を示していた。

独り。一体どれだけ不安で、どれだけ辛かったのだろう。

あの時、俺に手を差し出したのは、ただただ人肌に触れたかったからなのかもしれない。

「それから三日間。家事の仕方や電子機器の使い方を学んで、料理の本を頂いて、その日から色んなことに慣れてきて。作った料理を美味しいと言って貰えて。……あんなに幸せに感じたことは、きっと記憶の中の自分にも無かったと思います」

そう言って、舞は眼を開けて、俺の方を向いた。

それはとても幸せそうな顔で。

その瞬間、俺は色々それまで舞のことで悩んでいた色々な全てのことが報われたような。

そんな気がしてしまった。

「……だから、この場を借りて、改めてお礼が言いたいです。本当

に、ありがとうございます。秋也さん」

秋の風に銀の髪を揺らしながら、桃色の瞳で俺を見つめて舞は笑う。

そんな舞に俺が答えるべき言葉は、一つだった。

「――どういたしまして」

そんな風に晴れやかな気持ちに包み込まれた俺達が次に足を踏み入れたのは鳥居の反対側である、丁度今居る位置の左側。

そこに見えるのは、神楽（かぐら）を舞うための木製の神楽舞台と、この神社の春日造りの社、本殿だ。

「この国古来の建物って感じが伝わってきます。あの、真ん中にある舞台はなんですか？」

「ああ、あれは神楽舞台って言ってな。特別な行事がある時に使われたりするんだ。春に琴っていう和楽器を弾いたり、実際に神楽っていう舞を踊ったりする場所らしい」

「そうなんですか。……あの、舞台の上って、乗っちゃダメなんでしょうか？」

凄く舞台に上がりたいってことを表現したいような顔をしている。

確かに俺もあの舞台に乗ってみたいと思ったことは何度かあるが、

行事以外で上がるのは禁止と書かれているので上ったことはない。

けれど、舞なら。他の人に姿を見られたりはしない。

それに平日のこの時間帯であるので、周りに人は誰もいない。だから、きっと問題はないだろう。

「舞なら大丈夫だ。乗っておいで」

「……はい。じゃあ、ちょっと行ってきますね」

そういって俺の手を離すと、軽やかな走りで数メートル先の神楽舞台へと近づき、そしてタンッと地面をけると、長い白の振袖をたなびかせながら舞台の上に飛び乗った。

それは鮮やかなまでの着地であった。

舞は両腕を広げてこちらの方へと振り向くと、舞台の天上を見上げ、目をつむる。

意識を研ぎ澄ましたかのような雰囲気を纏い、そして腕を胸の方へと閉じたり広げたりしながら。

一歩二歩とその舞台の上でステップを踏んでいく。

そんな動きが続いて暫くすると、舞は眼をゆっくりと開いた。

「……そうだ……これが、私の……。そう、思い出しました。私の、郷土……」

そう呟くと、舞は俺の方を真っ直ぐと見つめた。

「秋也さん。これが今の私に出来る精一杯です。私の郷土……私の世界の『舞』を。私は今、秋也さんの為だけに、捧げます。――私の想いを、神楽に乗せて」

瞬間、辺りの全てが舞を中心に据えたかの様に、意気を変える。そよいでいた風も、聞こえていた小鳥の囀りも、木々の葉のざわめきも。全てが、止まった。

「……いきます。『紅一点・鼓舞神楽』」

それからは、周りの全てが全て、舞の空間であった。

それは、俺の意識も例外じゃない。

この世の全てが舞へと、目を、耳を、心を、身体を。

その全てを傾けるかのような心地さえしてしまう、圧倒的な、舞い。

それは落ち着いた、ゆったりとした動きで人を魅せる日本の神楽とは違い、身体全てで舞いを体現するのかのような。

なめらかな動きに加えて、力強い挙動。

舞いだけしかそこでは行われていないと言うのに、華奢な舞の身体で踏みゆくステップが作りだす、心地よい鼓（つつみ）の様な軽快な音。

銀の髪を揺らしながら、薄く開いた桃色の瞳に、白い振袖の揺れ動きが俺を魅せている。

そしてその振袖のたなびきが、その服装でしか成し得ない妖艶さを醸し出していた。

この世の全ての美しさをそこに凝縮したかのような――。そんな景色。

これが全て、俺の為の舞いだという。この世の全てを手に入れたと錯覚してしまう程の美しさ。

それを魅せてくれたことが。見る事が出来たのが。俺は嬉しくて堪らなかった。

その舞台からは、舞の気持ちが伝わってくるような、そんな心持さえするのである。

そんな鮮やか過ぎる舞の舞いに、ただただ俺は魅せられているのであった。

――そんな今日が、『舞』と居られる最後の日に成るだなんて事は、露も知らず――。

第４話　想いを神楽に、舞は舞う。（後書き）

平野神社は、春は桜の名所として有名です。神楽舞台ではお琴を披露があったりするので、雅（みやび）を感じられる場所と言えましょう。

第5話　世界を前に、少女は紡ぐ。

時刻は逢魔が時を過ぎ、夕焼けは夕闇へと姿へと変えていく。

秋の儚さ、落ち行く木の葉。この季節の終わり目は、出会いと別れの匂いを仄めかせる。

そしてまた時は過ぎ、現在夜中の１０時を過ぎた。

辺りは街灯を照らす灯りを除き、完全な暗闇に包まれている。

神楽舞台の舞いを終えた後、俺達二人はまたいつものアパートへと戻った。

成される会話は、何も知らない者が聞けば他愛の無い世間話のようなもの。

けれど俺からすれば、そんな何気ないものが何にも勝る貴重な時間であった。

夕食を終えた後もゴールデンタイムのテレビを話の種に、俺と舞は話に花を咲かせていた。

そして現在の時刻になり、そろそろ風呂にでも入ろうかと俺が台所の椅子から立ち上がろうとしたその時。

舞が俺の服の袖を抓んで、それを止める意を示したのである。

「……秋也さん。大切なお話が、あります。だから、少しだけ待ってください」

その舞の表情は真剣そのもの。

それは大切なこと内に決め、心を固めた者が見せるもの。

今までの長い会話の中でも、ずっと悩んでいたのかもしれない。

俺は席を立つのを止め、再び椅子に腰を下ろすこととした。

「真剣な、話なんだな。わかった。言ってみてくれ。何を言われたとしても、俺は覚悟を決める」

嘘だ。そんなものは建前だ。覚悟？そんなものは簡単に決まるものでは無い。

だが聞く手前である。言われた後に覚悟を決める用意、という名の覚悟は、せめて俺は備えることにした。

舞は心を落ち着つけるように深呼吸をすると、台所の直ぐ傍にあるベランダから見える月の方へと目を見やり、そして俺へと真っ直ぐな視線を向けた。

「秋也さん。信じる信じないは別として、聞いて下さい。先程の舞いで見せたように、私はこの国出身の者では有りません。かといって国外から来たというものでもありません。……言ってみれば私は、この世界の住人ですらないのです」

何を聞いても驚いた面持ちは見せるものかと決めてはいたのだが、駄目だった。

この世界の住人ではない、とは……。舞は、こんな俺の手の内に収まりきるような器では、全くといっていいほど無かったということだ。

「私の故郷は、ここと(こと)は存在を異にする世界の中の、一つの国。この世界で言えば東方見聞録に記された、黄金の繁栄を見せる島国の名です。私の祖国の名は、『皇国ジパング』。……私は、異世界から来た人間なのです」

異世界。今までとは一線を隔した単語の台頭であった。

魔術師であるというだけなら、まだ良かったのだが。

けれど、舞がこの世界の住人ですらないと言うのなら。

完全に記憶を取り戻した時の舞と居られる可能性は、ゼロに近いのではないだろうか。

俺は、魔術師でも、世界を渡り歩くことの出来るような人間でもない、ただの一般人だ。

俺がこれから舞の隣を歩くことなど、出来るのだろうか。

「まだ完全に記憶を取りもどしたわけでは有りません。私の名前も依然として。これは私にとっての真実です」

そうだ、名前。一番重要なモノを、まだ舞は取り戻していない。だがもしも思い出したその時は。俺は彼女を舞とはもう呼べなくなるのだろう。

「ですが、どうやって、そして何故私がこの世界に来たのか。何故秋也さんと、……椿さんにしか私の姿が見えなかったのかは、未だに分かりません」

けれども、ここまでくれば完全に思い出すまで後一息という所の筈だ。

最後の記憶の欠片が埋まれば、舞は全ての記憶を取り戻してしまう。

俺は、直感的にそう感じた。

そして、そう。先程の舞の発言から分かるように、この世界で舞を見る事が出来る人間がもう一人存在していたのだ。

椿が残したあの言葉も鑑みるに、やはり椿も舞を見る事が出来る稀有な存在だったらしい。

ずっと舞が居ないかのように振る舞っていたのは、何か理由があったのだろうか。

「椿さんは、私の存在にずっと気付いていました。あれは、確かにそこに人が居ることを認識している時に向ける視線でした。けれど私が居ないように振る舞ったのは、私と秋也さんに対する気遣いからだと思います」

どういう気の使い方だ。

どちらかというと後々俺に恥ずかしい思いをさせてからかいたかったじゃないのだろうかと思えるのだが。

「そしてあの独特の立ち振る舞い、身に纏う雰囲気、保有する魔力。椿さんは、恐らく、……いえ、確実に魔術師であると思います。それも、本来の力を取り戻した私でさえもこの世界では敵わぬ実力を持つ程、異質で高位の」

衝撃的な言葉だった。だが、思い起こしてみれば、思い当たる節は過去に確かにあったのである。

本日出会う前も以前俺のアパートを椿が訪れた際、未だ赤信号にも関わらず突然突っ込んできた車に轢かれそうになったことがあったのだ。

もはやぶつかる直前、死ぬやも知れぬ状況。半分俺も死を覚悟しかけた。

しかしその絶体絶命を打破したのが、突然発現した謎の突風であった。

俺の身体は車に当たる直前に吹き飛び、奇跡的に難を逃れたのである。

その時椿は、俺の後ろ側にいたのだ。

あの時は珍しい風が吹くことをあるもんだと思い込んで無理やり納得したものだったが。

魔術師の存在を知った今なら、あれが椿の仕業であったと考える方が確かに得心がいく。

「そう、か。あいつ、厨二病を卒業出来ないのかと思っていたら、逆に厨二の世界に入学してたんだな……。そりゃあの口調も治る筈

がない、か」

驚いたとはいえ、我ながら酷い感想であった。それと同時に、軽く嫉妬も覚える。

それならば、この世界で舞の隣に居る資格があるのは椿ということになるではないか。

魔術が使える。そのことに対する渇望を抱く感情が再び生まれそうになる。

が、そこで冷静な感情が一つ俺に気付かせた。

そうか。椿が舞の姿を見える事も、魔術師であることも俺に伝えなかったのは、舞にとっての俺の存在価値に、傷を付けたくなかったが為では無いのだろうか。

それが先程舞が言っていた、俺達への気遣いという真意なのかもしれない。

そうだとしたら、本当に良く出来た妹だぜ。ありがとな、椿。

「……これが今回、私が秋也さんに伝えたかった話です。正直、これもまた突拍子もないことだと思われても致し方ないと思います。だから、この二つの事は、信じてくれとは言いません。妹さんが魔術師だなんてことも、半信半疑で良いと思います」

舞が面だって俺にそう伝える時点で、これは真実なのだという事は俺にもわかる。

だが、この事実は確かに必ずしも信じる必要がないというのも事実だ。
特に、椿が魔術師であるということは。
本当はそんな存在ではなくて、ただのファンタジー好きな少女だと思ったままでも事足りることである。
自分の妹が、そんな人とは離れた業を持つのだと意識することもない。
それは舞の単なる妄言であると思って普通に椿と接するのが良いという意味だろう。
だが、俺としては既にそれを真実と受け止めた以上それは覆すことの無い事実であり、これから俺が生きていく以上付き合っていかなくてはならないものである。
その舞の心遣いを否定するつもりはないが、俺はそういうものとして受け止めるつもりだ。
さて、舞の伝えたかったことも理解したことだ。
ここで一つ、何か話題提供でもしてみようかと思考に頭を傾けてみる。
「段々と全容が分かってくると、パズルはどこにどんな破片を敷き詰めて行けばいいのか分かってくることってあるよな。多分、舞の記憶もそういう段階に来てるんだと思う」
俺がそういうと、舞はそれに頷いた。

きっと、それは舞自身も分かっていることだろう。
本当の自分を取り戻す。
それは本当に大事なことで、喜ぶべきものである筈だ。
けれど、それに頷く舞の表情はとても悲しそうで――。
そんな様子を見てしまった俺は、言葉に少し詰まってしまう。
「……ああっと、でも、さ。その当てはめるピース自身が見つからなきゃ、どうしようもないよな。それに、『探し物』は忘れた時に見つかるって事もあるし、灯台下暗しって諺もある。だから、焦る必要も――」
言いかけて、俺はその口から漏れ出す声を止めた。
いや、続きの言葉を、紡ぐことが出来なくなったのだ。
「――っ！秋也さんっ！」
瞬間的に驚愕の表情を浮かべ、そして椅子を倒しながら。
隣に座る俺を舞が突然、突き飛ばしたのである。
一体何事かと思う間もなく、突き飛ばしながら俺に覆い被さる舞の身体が目に入りる。
そして俺は舞と共に地面へと倒れ込むその刹那――。

「――っ！ぁぁぁぁぁぁ！！！」

舞が、叫んだ。そして続く、声泣き声に近い絶句。

そんな苦痛の声と、鮮烈な感覚に歪む舞の表情が目に入った。

次に目に入ったのは床を濡らす、真っ赤な血。

大量の赤。

――赤い、血？一体、誰の――？

唐突な余りの事態に困惑しながらも、俺は状況を把握しようと目線を動かす。

そして見えたのは、上段に西洋剣のようなものを構え、今にも振り下ろそうとしている、黒い悪魔のような化け物の姿だった。

「っ！」

考えるよりも先に、身体が動いた。

覆い被さる舞を腕の中に、その剣の切っ先が当たらぬ位置へと床を転がり、回避する。

コンマ一秒の差。

先程まで自分の首があった場所に刃が振り下ろされていた。
ギンッと音を立て、その剣の切っ先は床へとめり込む。
瞬間、心拍数が最大にまで上がる。
脳内にアドレナリンが大量に分泌されていくを感じる。
今まさに、俺は死の一歩手前を体験したのだ。
なんだ？なんだこの状況は……！そんな混乱の思考さえ、どこから現れたとも知れない目の前の悪魔は許してくれない。
めり込んだ剣を抜こうとしている、漆黒の衣を身に纏う、邪な印章をみせる翼を持った悪魔の姿が目に入る。
このままここで止まっていれば、再びあの西洋剣の両刃が俺達に向けて振り下ろされるだろう。
数か月前の椿が助けてくれた、あの車の衝突しそうになった臨死体験が役に立った。腰が抜けて立ち上がれないなんて事態は起きていない。
それだけは、幸運だったかもしれない。
「くそっ！何だってんだ！」
叫ばずには居られない。
とにかく、ここから抜け出す以外に奴の切っ先から逃れる方法は無い。

俺は、覆い被さる舞を抱きしめながら、膝を屈めて立ち上がる。
そして左手を舞の背中に、右手を舞の足にかけてお姫様抱っこの様式で抱きかかえ、玄関へと走り出した。
家のことなど、どうでもいい。
明確なまでに命を奪う意思を見せつけたあの悪魔の不法侵入者が、このままここに残ってモノを物色するなんてことは有り得ない。
そうだとしてもどうでも良い。さっさと奴を遠ざけたい！
俺は外開きの玄関のドアノブを回し、体重をかけて扉を開く。
ここはアパートの二階だ。体重の軽い舞を腕に抱きながら、俺は階段を駆け下りた。
舞の背中を支える俺の左腕には、何かに濡れたような感覚が伝わってきていた。
時刻は１０時を過ぎているが故に辺りは暗く、上手く俺の目で色を認識することは出来ない。
だが、痛みに顔を歪めるような表情を取る舞と、先程床に伝わっていた赤色を思えば、それが何なのかは分かる。
血だ。舞の血だ。
先程俺を突き飛ばして庇った時に、恐らく舞は左の横腹を切られたのだ。

街灯の下を駆けると、舞の着る白い着物の一部分が真っ赤に染まっているのが見て取れた。

最悪の状況だ。……どうすればいい。

病院に行こうにも救急車を呼ぼうにも、舞の姿を見れないのであるなら処置の施しようがない！

「……っつ！……秋、也、……さん？無事、ですか？……怪我して、無い、ですか……？」

ふいに腕の中から舞の声が聞こえた。良かった、どうやら舞に意識はあるらしい。

「ああ、大丈夫だ。舞が庇ってくれたおかげで、俺は怪我はしていない。それより、大事なのは舞の方だ！横腹を切られたのか、大量に血が出ている。止血しないと、このままじゃ――！」

「……ああ……良かった。……突然だったから、秋也さんに怪我を負わせてしまったんじゃないかと、私、気が気で無くて……。秋、也さん、あいつは、恐らく……ずっと、追ってきます。……私には分かります。……あの悪魔は、目標を消し去るまで、消えることは、無いです」

その言葉を聞いて、思わず自分の頭を振り返らせる。

「……秋也、さん。私を置いて、逃げて下さい。……奴の狙いは、……私です」

「っ、馬鹿か！俺が舞を置いていくはずないだろう！それに、無理して喋るな。傷に響くっ！」

そんな俺の心からの怒声にも、舞は怯まない。

俺が舞を抱えて走る中、淡々と途切れ途切れにも、舞は言葉を繋いだ。

「……あの悪魔の姿を見て、理解しました。……そして、完全に思い出しました。私は、この世界に拒絶されていたのです。……だから、私の存在も、……他の人に、認識されなかった」

世界が、拒絶？異世界から来たという舞を、この世界が拒絶したが故に、俺と椿以外の誰の目にも認識されなかったというのか。

「……世界にとって、異世界から来た私は異分子です。……この世界へ渡る際の障壁に拒まれつつも、私の存在は、この世界に生きたまま辿り着きました。……だから、私の記憶も、その過程で失わされたのだと……思います」

街灯に一瞬照らし出された悪魔の姿が目に入った。

舞の言葉通り、奴は俺達を追いかけてきているようだ。

舞が記憶を失ったのは、この『世界』のせいだと言うのか。

俺はその言葉を聞いて、一瞬で厭世家になりそうになった。世間ではなく、世界に対する。

「……あの悪魔は、恐らくは世界の創り出した使い魔。……世界の

障壁から生き残った、異分子の私が記憶を取り戻したことで、私の存在に気付き。今度は物理的に葬る為に生み出された、……殺人人形」

そこまで言って、舞は苦しそうに咳き込み始め、そして危険な咳音と共に、その小さな口から血を吐きだした。

瞬間、俺の息も止まりそうになった。

このままじゃ、駄目だ。舞が危ない。舞が、死ぬ。

舞が死ぬ。舞が死ぬ。舞が、……死んで、しまう。

「……げほっ。ぅ……ん……。秋、也さん。だから、奴の狙いは、私です。秋也さんに、最初に斬りかかったのは、私の側にいたからだと、思います。……このままじゃ、秋也さんまで、殺されて……しまい、ます。そんなのは、嫌――だから」

「……嫌だ！そんなのは、嫌だ！……舞を見殺しにするような選択をする位だったら、俺も一緒に――。くそっ、なにか手は無いのか！」

あったら困ってなどいやしない。

頼みの綱の椿は、既に京都を去っている。

止血するにも、奴に追いかけられながらそんな期用な真似をする技術なんて俺には無い。

――奴を、倒せれば。魂を売ってでも、俺を庇ってくれた舞を死なせたくはない。

そんな絶望的な状況の中、舞が小さく。躊躇いがちに、苦しそうな声で。

けれど、はっきりとした意思を持ちながら。

ほんの一筋の希望を抱かせてくれる一言を呟いてくれた。

「……有ります。……この場を、乗り切る可能性がある方法が、……一つだけ」

驚いた俺は、舞の方を見やる。

その舞の綺麗な顔の口元は、血で覆われ、桃色の綺麗な瞳の目じりは涙で濡れていた。

下がった眉に、悲しそうな、本当に哀しそうな笑顔を浮かべて。

彼女は俺に、この言葉を紡いだ。

「その為に……秋也さん。私と一緒に……。――死んでくれる覚悟は、有りますか？」

第6話　魔術の少女と、主様。

『死んでくれる覚悟は、有りますか――？』

……心が揺らいだ。

舞と共に、死ぬ、覚悟？

「……本当に、どこまでも低い、確率の話です。……この方法を、使えば、お互いが生き残るよりも……二人とも、死ぬ確率の方が、圧倒的に、高い……のです……」

狙われているのが舞だけだと言うのなら、舞を置いて逃げてしまえば俺は死ぬことは無い。

舞は、姿の認識されない存在だ。恐らくは、あの悪魔もまた同様に。

警察も動かない。今日あった出来事を誰も知らない。

もしここで舞を見捨てても、誰も俺を咎めない。

誰もそんなことは――。

馬鹿か。身を挺して俺を守ってくれた、舞を見捨てる？

こんな俺の隣りで笑ってくれた、こんな少女を、舞を。俺が見捨てる、だと？

出来るわけがない。

そもそも舞が庇ってくれていなかったら、俺は既に命を落としていたかもしれない身の上だ。

そんなくだらない、馬鹿げた思考回路など受け付けない。受け入れられない。受け入れたくはない。

「……構わない。その方法を、教えてくれ」

流石に声が震えた。

意気を保とうとはしたけれども、小心者の俺にはそう答えるだけで限界だった。

「……無理、しなくて、良いです。無茶を言っているのは、わかっています。聞くだけ聞いて、……私を置いていくことを、決めてくだされば、良い、ですから」

そう言って、腕の中の舞は、左手を伸ばし、俺の頬へと触れ。

そして、辛そうな顔で笑った。分かってる。

今一番つらいのは、舞だ。

肉体的にも、精神的にも、俺の比じゃない。

人に死ねと言っているようなものだ。そんな事を押し付けようとしている自分に、無情でいられる筈が無い。

冷たい舞の手の感触が頬に伝わる。

風前の灯火。舞の力ないその小さな手に、不謹慎にもそんな印象

を俺は抱いてしまった。

馬鹿だ、俺は。今もまだ、覚悟なんて決めていやしなかった。

舞がこの話を切り出す時に決めた覚悟と比べれば、俺の思考など屑にも等しかった。

俺がこの場から確実に生き残ることと、舞という腕の中の大切な少女を、命をかけてでも救う比重。

アヌビスの天秤にかけても良い。釣り合うことは、絶対に無いだろう。

そんなのは、最初から決まっていた答えなのだ。

自分でも、もうとっくに分かっている筈だ。

舞という少女が、自分にとって、どういう存在なのか。

「良い。決めた。俺はもう逃げない。死ぬときは、舞と一緒に死んでやる。だからもう、何も気にするな。俺は舞無しじゃ生きていけないんだ。舞が死ぬときは、俺が死ぬ時と同義なんだよ。だからもう、いい。迷わなくていい」

今なら、言えるだろう。ついぞ知れずとも、自分の中で芽生えていた、ここにある気持ちを。

「――俺は、君が好きだ。舞」

それは、俺の生まれて初めての告白。

本気で好きになってしまった、一人の少女への。本当の意味で命をかけた告白だった。

たかが二週間の関係に命をかけられるのかと、人は言うだろうか。

いいや、違う。本当の運命の恋ならば、時間など関係の無いこともある。一目惚れで始まる恋もあるだろう。

だが、こんな決意が出来る位だ。寧ろ、二週間は、俺と舞にとって長すぎる程長く、そして短すぎる位に過ぎるのが速い瞬間(とき)であったのだろう。

「秋、也さん……。……ああ、もう、どうして、そんなに……そんなに、嬉しいことを、言って、くれるのですか……。私も、……私も。秋也さんに、伝えたい、です。この、気持ちを……。ああ、本当に、……秋也、さんが、――う―つか――だったら、良かったのに――」

舞の声も、弱弱しくなってきた。聞き取れない言葉も、出てき始めた。

もう、時間が無い。

「私、の意識も、もう持ちません。……二人一緒に生き残れたら、その時に、全てをお話しします。――ここからは、『契約』、です。どんな願いであっても、私が必ず叶えると、お約束、致します。秋也さん、貴方の望みを、……言ってください」

「……俺の望みはただ一つだ。舞が俺の隣で、生きて、笑ってくれ

ること。異世界から来た存在だというなら、この世界に居る間だけでも良い。俺の側に、ずっと居てくれ。それだけだ」

もう告白は言い切った身だ。今更、恥ずかしがることも無い。俺は躊躇うことなく、自分の中にある願いをぶちまけた。

プロポーズのような俺の言葉を聞いて、舞目をまん丸くして。そして、ぷっと笑った。

儚げだけれども、その瞳には確かな感情を灯して。

「秋也、さん。欲が、無さすぎです。……どんな願いでもと、言ったのに。でも、そんな秋也さんだから、私は……」

何を言うのだ。舞に傍に居て貰えること。

今の俺にとって、これ以上の望みも欲も、有るはずが無いというのに。

「――『契約魔導陣、零級』、展開。……秋也さん、唇を少し切って、私と、口づけを交わしてください。……それが、発動の条件です。もう、身体が、動きません。だから、秋也さんの方から……」

聞きとめた瞬間俺は足を止め、歯で下唇を噛み切り、そして舞に自らの口を重ねた。

この世に生まれ落ちて29年。

藤野秋也、生涯初めてのキスは、彼女の血の味がした。

互いの口を重ねて、数秒後。

舞がそれを離そうとする動作を見せたので、俺は名残惜しくも離れることにした。
柔らかな彼女の唇の感触が、俺の後を引いている。
その時みた舞の頬は、涙と共に朱色に染まっていて。
そして、最期の笑みを浮かべて、舞は言った。
「……秋也さん、ありがとう。……私も、私も……。秋也さんが……大好き、です」
――ごめんなさい。……さようなら。
瞬間。己に走る動悸。今まで感じたことのない位に異常なまでの、凄まじい勢いで心拍数を上げていく、お互いの心の臓の鼓動。
お互い……？何故俺が、舞の感覚が分かるかのように状況を述べられるのか。
一体、何が起きている。身体が熱い。突如、灼熱の大地にさらされたように皮膚が今にも燃えそうな痛みが走る。
煮えたぎる血液の流れ。吐き出しそうなまでの嗚咽に、異質な存在を身に纏う違和感。

更に横腹に走り始める、脳の神経さえも侵してしみそうな痛烈な激痛。

だがそれも、舞も同じく感じている痛み。共有された感覚に、腕の中の舞を、俺はより一層強く握りしめた。

負けられない。これが舞の痛みなら。

俺と舞が生き残る為の、戦いならば――。

苦痛に歪む己の顔を前へと向ける。

見える。あの悪魔が、もう、直ぐそこまで迫ってきているのが。

距離にして四十メートルといった所か。

確実にまずい、だが、俺の足は動かない。動けない。

俺の意志に反して、身体の全てがそこからの移動を許してくれない。

もう、駄目なのか。……いや、まだだ。諦めるな。

舞もこの苦しみに耐えている。それが、分かる。

逃げない、その明確な意思。戦い続ける意思。この小さな身体にどれ程の意思を備えているのか。俺にはそれが伝わる。

全ての限界が、沸点にまで迫る、その瞬間。

――世界が反転した。

森羅万象から解き放たれたかのような解放感。全てから許されたような、そんな感覚が走った。

だが、その解放感に歓喜していられる瞬間(とき)もない。

もはや悪魔と俺達の距離は目と鼻の先。直前に、振りかぶられた西洋剣の刃が見えた。

まだ、俺の足は動かない。

解放感と相まって、戻ってきた身体の感覚は、まるで自分の身体ではないかのように言う事を聞いてはくれなかった。

これで、終わりなのか？こんな奴に振り下ろされる刃に、俺達は命を散らすのか？

いいや、まだだ。舞の意志が伝わる。この直前にも、まだ諦めてはいない。

その凶悪な刃が悪魔によって振り下ろされるその刹那。

舞は応えた。

「――三級(みきゅう)、硬化っ！」

俺の腕の中から舞は自分の左手を刃の直線状に振り上げた。

直後、訪れる衝撃。

言葉通り硬質化したらしい、舞の身に纏う右腕の振袖は。振り下ろされた西洋剣の刃をその一身に受け止めていた。

舞の着物に刃が通らぬと悟ると、その刃を再び振りかぶり、構える悪魔に対し。続いて紡ぐ、舞の第二の言の葉。

「二級（ふきゅう）、灼熱炎！」

幻想的な、事細かな多重線を描いた円状の物体が悪魔の目の前に現れると同時に、その舞の言葉が重なる。

あれが、魔導陣というものなのだろうか。

瞬間、悪魔の右腕と、それを持つ西洋剣に重なって現れたのは。

まるで地獄を連想させるかのような、歪んだ恐ろしさを放つ炎。

見る者全てを焼き尽くすとでも言わんばかりに、太陽の熱をも帯びさせたかと錯覚させるような熱気が迸る、灼熱。

「グ、ガァァァァァ！！！！！」

その後、悪魔が断末魔のような苦渋の声をあげる。

その灼熱が消えるとともに、悪魔の右腕の二の腕から先。そして今までの脅威であった西洋剣が、あたかも最初から無かったかのように完全に消え去っていた。

悪魔は痛みと警戒からか、その漆黒の衣らしき物体に包まれた足で、二歩三歩と後退する。

これが舞が決め込んだ、初の悪魔への反撃の結果だった。

そしてその瞬間に気付く。

俺の身体も先程より多少言う事を聞くようになっていた。

ぎこちなさは残るが、どうやら身体は脳からの命令を受け付けているようだ。

俺の腕の中から飛び出そうとしている舞の動きを感じ、俺は舞を抱えていた腕を離した。

トン、と地面に着地する舞。

俺の方を振り返ることをせず、舞はただ悪魔の方を眺めて佇む。

そして、俺が初めて聞く――初めて出会う彼女の、第一声が放たれたのである。

「……二級の魔術で、この程度の威力、ね。依然としてこの世界からの抵抗を魔導陣は受けるわけ、か。まあそれでも、あんたみたいな雑兵を焼き殺すには事足りるわ。っと、まずは傷を塞ぐべきよね。三級、治癒」

その言葉と同時に舞の斬られた横腹の位置に展開される先程のような魔導陣。

そして、それは、服越しに彼女の斬られた部位を修復しているかのように、数瞬小さな光を放った。どうやらあれには、怪我を治す力が有るらしい。

いや、それよりも驚くべきは、急激に変化した舞の口調だ。

あれは今までの舞のものとは違う、異質な印象を俺に感じさせた。

……そう、まるで舞が、別の誰かに取って代わってしまったのような。

その目下数メートル先には、睨みつけるように舞の――少女の様子を窺い（うかがい）ながら。左手で失った右腕を抑えるような動作をする悪魔の姿がある。

その後、奴は残った上の右腕から離した左腕に太い血管のようなもの浮かびあがらせた後、今度は左手の五本の指から強靱な爪を生やし始める。

めきりと音が立つかの様な挙動の後に、現れた悪魔の鋭い五本の爪の長さは一メートル程の長さを優に誇っていた。

「ふーん。そんなことも出来るわけね。でも、私にとってはそんなもの、脅威にも何もならないわよ。ま、そんな雑兵でも私に一太刀浴びせた訳だし、ここは名乗りを上げて置くべきかしらね。命を懸けての戦いなのだから」

悪魔と相対する舞、……いや、その少女の面持ちはこちらから見えないが、未だに少女と身体を共有するかのような感覚が少し続いているが故に、分かる。

彼女を纏う空気がガラリと変わった。その意識も完全に切り替えたように感じる。

舞が神楽舞台で見せた、あの舞いの様に、全ての意気が少女を中

心に据えられたかのような雰囲気を纏う。

そして彼女は、大地に吠えた。

「聞け、『世界』よ！我が名は、マイ・マイム・ベサソ！皇国ジパングに仕えし、誉れ高きベサソの称号を冠した、異界最高峰たる魔術師なり！世界に遣わされし悪魔よ、いざ尋常に、勝負っ！」

名乗り声と共に、悪魔は少女、いや、マイへと駆け出した。

距離が間合いに入ったと思われたその時、悪魔は強靱な刃を思わせるその爪を構えた左手をマイへと横合いに薙ぎかかる。

「四級、飛箱（とびばこ）っ」

身軽な身のこなしで跳躍するとともに宣言したその声に、空中に魔導陣が現れた。

空中に地が存在するかのように少女がその真上に着地すると同時に、魔導陣の丁度真下を悪魔の爪は通り過ぎる。

それを見届けるまでも無く、その魔導陣を蹴り、マイは空中へと舞った。

悪魔の頭上を通り過ぎての空中での一回転。

身体を翻しながら、彼女は宣言する。

「一級（ひきゅう）、灰燼炎！」

悪魔の頭上に現れた直径五メートルほどの長さを見せる赤色の魔

導陣が展開される。

悪魔はその少女の姿を目で追おうと顔を上に向けたが、それが悪魔の見た最期の瞬間だった。

断末魔の叫びを上げるまでも無く、一瞬の閃きと共に悪魔の身体はまさしく灰燼の如く炭と化し、その場に砂のように崩れ落ちてゆく。

そして先程まで悪魔が駆けた地面へとマイは着地した。

その悪魔の姿は灰燼ともに消えゆく。

「ふん、呆気ないわね。ま、名乗りもあげずに闇打ちにかかる奴にはお似合いの最期よ」

その様子を見届けると、少女は俺の方へと視線を向けた。

その瞳に、俺は囚われる。

幾度となく見てきた赤みがかった彼女の桃色の瞳、そのものには変わりはない。

だがそれが、今までとは違う、何よりも強い意志を放ち、強情なまでの異彩を放っていた。

そして、あの舞のものとは思えない程の薄ら笑みを浮かべて、彼女は俺に言うのだった。

「――初めまして。私は、マイ・マイム・ベサソ。誉れ高き、高名な魔術師よ。これから宜しく頼むわね。……私の、主様（あるじさま）」

第6話　魔術の少女と、主様。（後書き）

多分わかる人は当然の如く分かると思いますが、彼女の名前の由来は、キャンプファイヤーの時に踊るあの曲です。
『マイム・ヴェサソン』それは、水に感謝をするという意味らしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7483z/

魔法使いの主様っ！

2011年12月25日01時28分発行